
アルスラーン戦記～私だけの物語～

憂鬱なもののけ姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルスライン戦記〜私だけの物語〜

【Nコード】

N4800P

【作者名】

憂鬱なものけ姫

【あらすじ】

聖賢王ジャムシードの遺言によってパルスの地に集まることになった、

選ばれし四人。

その中で四人は恋をし、戦うことを覚え、成長していく……。

すべてはパルスの地を荒らす蛇王ザッハークを倒すために。

四人はどのような展開を見せるのか？

初めに（前書き）

初のファンタジーです。

しかしこの時点ではまだ主人公はでてきません。次の話でてきます。

なるべく主人公が好きになる武將に彩香のいろんな一面を見せて、ドキッと

させてみたいです（笑）そういう機会はたくさんやってくると思うので、その時はもう彩香の可愛いパワー出しまくりで。いや、彩香が出すのではなくて、私がださせます（笑）

何はともあれ、これからお付き合いよろしくお願いいたします。

初めに

パルス暦301年、第十六代国王ゴタルゼス二世崩御す。没年六十一歳。王太子オスロエス即位して
第十七代国王オスロエス五世と称す。

パルス暦303年、オスロエス五世、王弟アンドラゴラスを大將軍^{エーラーン}として国境の東南
バダフシャーン公国を滅ぼす。バダフシャーン公カユーマルス自殺。
その妻タハミーネ、アンドラゴラス
より王都エクバターナに連行さる。

パルス暦304年、第十七代国王オスロエスにわかに崩御す。没年三十歳。王弟にして大將軍たる

アンドラゴラス、即位して第十八代国王アンドラゴラス三世と称す。

パルス暦305年、アンドラゴラス三世、タハミーネをたてて王妃となす。

パルス暦306年、アンドラゴラス王とタハミーネとの間に王子誕生。アルスラーンと名づく。

パルス暦310年、トゥラーン王国の軍、北方より侵攻、撃退さる。

パルス暦311年、アルスラーン王子を正式に王太子となす。

パルス暦312年、トゥラーン王国の軍、ふたたび北方より侵攻、撃退さる。

パルス暦313年、ミスル王国の軍、西方より侵入。王都エクバタ
ーナにせまるも、パルス軍これを
撃破す。

パルス暦315年、トゥラーンおよびシンドウラ、チュルク、三国
の連合軍、東北方、東南方、
東方より侵入。パルス軍これを撃破す。

パルス暦320年、西北方ルシタニア王国軍、パルスの友邦マルヤ
ム王国を滅亡せしめ、パルス王国
に侵入。アンドラゴラス三世、自ら軍を率いてアトロパテネの野に
侵略軍を迎え撃つ。

王太子アルスラーン初陣す。ときに十四歳・・・・・・。

（パルス王国年代記より）

そして今アンドラゴラス三世、ルシタニアの捕虜となる。

アルスラーンは「戦士の中の戦士」と呼ばれる雄将ダリューンを引きつれ、ダリューンの

昔からの友人、ナルサスを訪ねる。

ナルサスは昔アンドラゴラスに仕えていたが、治世にゆるみが出始めたとき、ナルサスはもう宮廷人

としての生活に耐えがたい気分を抱いていたようである。

そのためナルサスはさまざまな改革案をアンドラゴラス王に提出したが、なかなか受け入れてもらえ

なかった。王はナルサスの改革案を無視し続けたがそのうち放って置けなくなった。

神官達が、ナルサスを宮廷から追放するよう、王に願い出てきたのである。

ナルサスは、神官たちが地位と特権を使ってさまざまな不正を働いているということ突き止めた。

これらの悪事を調べ上げ、証拠をそろえると、ナルサスは王に厳重な処罰を与えてほしいという事を要求した。

このことに猛烈に腹を立てた神官達はその夜、ナルサスを襲って殺そうとしたが、これは失敗に終わり、

ナルサスは良い機会と思ったのであろう、宮廷を出奔して自分の領地へ帰ってしまったのである。

そして今ナルサスは侍童のエラムとともにバシウル山に引きこもり、毎日絵を描いたり、異国の書を

読んだりして平和に暮らしていた。

一方のダリューンは、冑の房から甲、軍靴にいたるまで黒一色のよそおいで、マントの裏地だけが血のように赤い。陽にやけた若々しい顔は、するどく引き締まって、

美男といってもいいであろう。十代で戦士、獅子狩人の称号をえ、最年少の万騎長でもあった。

「戦士の中の戦士」という呼ばれ方さえある。それだけ強いのだ。これまで何人もの強敵を斬ってきたか、本人でさえ知らないであろう。あるとき、トゥラーンの

英雄と讃えられていた戦士を一太刀で首を討ち取り、絹の国で「江南四虎」と呼ばれる四人組みの
屈強な戦士達とも命がけで戦い勝利をおさめた。

ナルサスもアルスラーンに協力し、父王を救う旅にさまざまの勇将が仲間に加わった。

こうしてできたアルスラーンの仲間たちを後世で「解放王アルスラーンの十六翼将」と呼ばれる事になる。

その十六翼将は、ダリューンを始め、ナルサス、エラム、ファランギース、ギーヴ、アルフリード、
キシウッド、ジャスワント、ザラーヴァント、イスファーン、トウース、グラージェ、メルレイン、
ジムサ、クバード、最後にパラフーダの十六人。

十分な兵力を持って、アルスラーンとその翼将たちは王都エクバタナヘルシタニア軍を討ちに行き、
そして見事な勝利をおさめたのである。

この話は、これらの戦乱が終わってからの物語。

初めに（後書き）

ああっ！もう何がなんだか分からなくなってきた。

話飛ばしすぎだろっ！だって早く次の話書きたいんだもん。（言い訳すんな、自分）

なので分からないところがあったら遠慮なく言ってください。
答えますので。

四剣士の出会い？（前書き）

どうもです。これは主人公にあたる四剣士の一人の出会い。
このあとの三人も書いていく予定ですのでよろしく。

四剣士の出会い？

「はい、撮影お疲れ様！」

最後にフラッシュが一回鳴り、撮影が終わった。

「ありがとうございました！」

「彩香、今日プリクラ行かない？」

「ごめん、今日はやめとく。」

「そっか。じゃあまたね。」

「うん、また。」

私は小梨彩香。表は普通の女子高生。でも裏は有名雑誌の読者モデル。バリバリのイケ子へ変身する身。

つかつか。電車のホームを歩き、電車に乗ろうとする。

『……者、剣を操る者……。パルスにおいてここに四剣士が集うとき。

パルスの勝利、永遠なる平和は確定される……。来るのだ、四剣士の一人よ。

聖賢王ジャムシードの御名において……。』

え？何今の？

電車の床に足を乗せ……。あれ、床がない。さっきまであったはずなのに。どうして？

ちよっと待ってよ、足掛けるところ間違えた？落ちる？もう闇まっしぐら。

「……ちょ、ちよっとー！……！」

・・・何？ここどこ？私はどうしたんだっけ。

「え、どこなの？」

まず出た最初の一言。次に辺りを見渡す。荒野のようだ。こんな何も無い所でどうしろっていの？

「そこで何をしている？」

あわてて飛びずさった。そこにいたのは、黒い馬に乗った頭からつま先まで黒一色の冑を着た剣士のような人。

しかしマントの裏地だけが血に染め上げたように真っ赤だった。こんなところに人、いたんだ。でも助かった。

「だ・・・誰？」

「ほう、俺の名を知らない奴がいたとはな。俺はパルス国王アルスライン陛下にお仕えしている
ダリユーンだ。・・・そなたは？」

「パ、パルス？そんな国知らないわ。どうしてここにいるのかも。異世界？もしかして・・・。」

「俺はそなたの名前を聞いているのだが？」

「え、あ、ごめんなさい。私小梨彩香っていいいます。でもなんでここにきたのか全然分からなくて・・・」

「ほう、それではパルス、シンドウラ、トゥライン、チュルク、ミスル、マルヤム、ナバタイ。

いずれかの国の名前を存じているか？正直に答えてくれ。」

「何なの？全然分からないわ・・・。私が前までいたのは日本という国で、そんな西洋風じゃないし（西洋風だけど）、周りに城なんかないっ！」

「そうか。その言葉を信じていいのだな？裏切ったらおぬしに死を迎えてもらうだけのことだ。

いいな？」

「分かった・・・。」

「行くあてがないのでは？」

なぜか自分がきている服に目がいった。

さっきの服とは違い、昔の動きやすそうな軽装に身を包んでいた。

下地は桃色で縁取りでサテンらしきものがあしらわれている可愛い服だ。ふと腰を見ると、一本の剣が。

これを見て私はあることを思い出した。

『ここに四剣士が集うとき、パルスの勝利と永遠なる平和は確定される・・・。』

「ダリユーン！私この世界に来る前に頭の中に何か言葉が響いてき

たの。

『剣を操る者、パルスにおいてここに四剣士が集うとき。パルスの勝利と永遠なる平和は確定される。

来るのだ、四剣士の一人よ。聖賢王ジャムシードの御名において。』
「……だと思う。」

そう言いながら私は自分の剣を抜いた。見事な装飾の細身の剣が私の手にあった。ひととき目立つ紫色の宝石が太陽の光を受けて煌めく。

「紫……」

私はポツリと呟いた。

「それはジャムシードの遺言ではないのか。いずれ未来に四剣士がやってきてパルスの国王と一緒に

蛇王ザッハークを倒すという……。そなたはその一員では？ しかもその剣はジャムシードの

遺品で全部で四品あるらしい。細身の剣、長剣、短剣、そして普通の剣。

それぞれ色が付いていて四剣士が装備するものだといわれている。」

「私は細身の剣。そして付いている宝石の色は紫。でも私、剣の使い方全然分らないんだけど……」

「そうか。なら俺が陛下にお目通りを願って、誰かに……。サヤカの練習についてもらうとしようか。陛下はお優しい方だ。しかもそなたと同じくらいの年齢だ。きつとお前のことも喜んで受け入れて

くださるだろう。」

「・・・そんなことできるの？」
「できるさ。」

そう言って頭の冑を脱いだ。私と話しているときは、まだはずしていなかったから。

茶色の長い髪が風にゆれた。そしてダリユーンは優しげな微笑を私に投げかけた。

このとき私は確信した。ああ、私はこの人に『恋』を覚えてしまったのだと。少し話しただけなのに、
ダリユーンは自分のことを分かってくれた。ちゃんと。

「さあ、そうと決まったらエクバターナへ行くぞ。俺の馬に乗ってくれ。」

よいしょとダリユーンに腕を引っ張られながらなんとか馬に乗った。

そうして私達は王都エクバターナへと走り出した――――。

四剣士の出会い？（後書き）

どうでしたでしょうか？

四剣士の出会い？（前書き）

四剣士の一人がパルスに向かうきっかけとなったお話。
どうぞ☆（下へ！←）

四剣士の出会い？

「次っ！小沢っ！」

「はいっ！」

トランポリンに乗り、とび具合を確認する。

まずは一回転。・・・成功。腕を水平に伸ばし、さらに空中三回転。これもまた成功。

『・・・者、・・・剣を操る者・・・、パルスにおいて四剣士が集うとき。

・・・パルスの勝利は確定される・・・来るのだ、四剣士の一人よ。聖賢王ジャムシードの御名において。』

・・・ん？何だ今の？四剣士？パルス？聖賢王ジャムシード？
んなの世界史でも習ってないぜ！なんかのウラ事情かなんかか？

・・・まあそんなことはどうでも良い。今のはただの幻聴だろう。
飛ぶ事だけを考えるんだ、華麗に舞うことだけを・・・。

一番高くまでとんで三回転。しかも斜めの方向に。

今日めっちゃツイてるんじゃないか？なんでも成功してやがる。
でも見えるんだよねあ、着地するはずのトランポリンが真っ黒な穴
になってるんだが。

マジか、これ？さっきは幻聴、今度は幻覚。おいおい、いい加減に

してくれよ。

しかし空中で体勢を変えることもできず、俺はその穴の中に入って行った。

「ツイてねーーーー！！！！！！！！」

その叫び声とともに……………。

☆ー☆ー☆ー☆ー☆ー☆ー☆

ふと目を覚ますと、見慣れない天井が。
すると俺の顔をのぞいてくる人が。

「大丈夫ですか？」

「あ、ええ、あなたが私を見つけてくれたのですか？」
初対面のひとには礼儀正しくなる自分。

「私の主人がね、道で倒れてる貴方を運んできたのよ。ほら、ちょうどあそこ。」

と婦人が指指している先には、一本の細い道があった。

「そ、そうなんですか……………。ありがとうございます。」

しばらくその婦人とはなしていると、男がはいってきた。

「目を覚ましたかね？」

「ええ、さっき。」

「そうか。・・・君、名は？」

「小沢、雷輝です。ここはどこなんですか？」

「ここはミスル。ミスル国だ。」

「・・・はあ、よく分かりますのですが。」

「・・・なぜ、倒れていた？」

「分からないんです。トランポリンを飛んでいたら・・・。」

「とらんぼりん？」

「あ、いえ、なんでも。」

よく分からぬまま、一週間は過ぎてしまった。でも楽しかったんだぜ？近所の子供と遊んで。

久しぶりにこんな子供じみたのやった。でも楽しくてやっぱり自分は男子なんだって実感した。

（イヤ、男子だし。）

この世界に来て、8日目。

今日も近所の子供と遊んでいたら、

「奇襲だっ！！！！」

と叫ぶ声が耳に聞こえた。

あちこちで人がふためく。

するとまもなく一箇所から血のしぶきが。

「来たな・・・。」

俺はつぶやいた。

いろんなところで人が斬られ、倒れていく。

やっぱり俺も戦ったほうがいいのか？
そう思い、肩に担いでいた剣を抜き取る。

今まではよく見えなかったが、豪華な宝石が剣の至るところに散りばめられている。

一際目を惹く青色の宝石が輝いた。

サファイア
「青玉か？」

自分の小さな呟きは、馬鹿でかい声にかき消された。

「てめえも生きていたのか。・・・ん？なかなか良い剣を持ってるじゃねーか。銀仮面卿に指しだせば、きつと良い印象を俺に持ってるかもしれん。まあそれはお前を殺してからの話だな！」

「おめーも銀仮面被ってんじゃねーか。」
そういいながら辺りを見渡すと同じ銀仮面を被った奴がたくさん平民を斬り付けていた。

でも一番腕が立つやつはもう目に見えている。光の弧を描く。なぎ払う。はたく、刺す、斬る。
全ての術において完璧だ。あんなのに斬りつけられたら一溜まりもない。

俺はさらに言葉を投げた。

「こういう奴がこまるんだ。さっさと人生終わらせたらどうだ？俺がその手伝いをしてやるが、どうだ？」

「

「何を抜かすか！」

そう言って俺達の戦いは始まった。

かっこいい言葉を言ってみたものの自分に剣が扱えるかどうか不安になった。

敵のほうが剣術に長けているだろうし、俺はペーパードライバーみたいなものだ。（「ドライバー」を

「マルダーン」（戦士）に変えるだけ）

しかしそんな不安は必要なかった。思ったより相手は強くなかったのだ。それでも剣技は互角で油断できない。

俺が剣をふると、相手も打ち返し、火花が散る。

こすれあう音も混じり、戦いはますますヒートアップした。

相手も疲れてきたのであろう、足取りが浮ついていた。

首領らしい男が言った。

「おい、何を手間取っている、平民なんぞに！」

「銀仮面卿、申し訳ございません。なかなか決着がつかない故、もう少しお待ちいただきたい！」

すると首領らしい男は俺が相手している銀仮面に近寄って剣を持ち、肩の上を水平に滑らせた。

男の首が飛んだ。胴体はバランスがとれず、地面にドサリと落ちた。首も落ちた。

「平民すら死に追いやれない奴は死ね！他の者も今見ただろう。パルスの兵士ならまだしも平民にも勝てぬような輩は、俺の手にかかって死ぬことになる。気力のある

奴は俺についてくればいい。

しかし己の身も守れぬような奴は今すぐここで朽ち果てろ！ここで俺が成敗してくれるわ。」

その声はまさしく雷鳴にふさわしいものだった。

しかし首領以外の銀仮面はみんな片膝を付き、

「私にとっての首領は銀仮面卿。お望みとあらば命を投げ出す所存。死ぬまで銀仮面卿について行く

部下。正統の国王に名誉あれ！」

といって立った。

「・・・さて、貴様はどうしてやろうか。」

全身に震えが走った。こいつが出す殺気はもう歩く死神のように俺の体を圧倒した。

しかしそれもつかの間、

「・・・聖賢王ジャムシードの遺品・・・？」

と疑問に満ちた声をもらした。

今だ！俺の心で誰かが叫んだ。

力まかせに剣を首領の仮面にぶつける。

割れないと予測していたが、あっさりとその仮面は割れてしまった。直の顔が現れる。

右半分が火傷の傷に覆われていた。しかし左半面は秀麗な男の顔だった。

キッと憎々しげににらみつけられ、こんどこそ斬られるか、と思った瞬間、「・・・行くぞ。」

と悔しげに言い、出て行った。

しばらくすると銀仮面たちは消えていた。ただ砂埃が舞っているだけだった。

「おじさんとお婆さんは？」

と思い、家に駆け出す。

バン！と勢い良くドアを開ける。そして必死にその姿をさがした。

見たものは血にまみれた二人の男女の姿だった。

「おじさん・・・？お婆さん・・・？」

問いかけてみるも返事は返ってこなかった。

それで俺は死んだというのを知った。

不思議と涙は出てこなかった。ただ、寂しいと悔しい気持ちが残っていた。

近くから大きい石を持ってきて剣に力を入れて墓石を作った。

一週間以上お世話になったんだ、これぐらいはしないとだめだ。これぐらいといっても全然たいしたものではないのだが。

「俺、絶対この仇をとってみせるから。だから見守っててくれよ、おじさん、お婆さん。」

机を見ると地図が置かれていた。

「ここはミスル・・・。そういえばあの男は・・・生きていたひとがパルス人って言ってたな。」

パルス人ってそんなひどい人間なのか？」

地図を見る。けっこう遠く感じられる。

「ええい、この際だ。馬に乗ってかつ飛ばしてそのパルスとやらに
いってみようじゃねーの!!!」

よし、そうとなったら・・・この家の食料もらって旅に出よう。地
図も持って。」

少しばかりの食料と地図を持って近くにあった馬に乗る。剣がある
のも確かめる。

少々乗るのに手間取ったが。

「さて・・・では、パルスに出発!」

こうして四剣士の一人もまたパルスに駆け出したのであった――――

――――。

四剣士の出会い？（後書き）

どうでしたでしょうか？

次は「光を貴方に・・・。」の3話目を書く予定です。ので応援よろしく。
バァーイ☆

四剣士の出会い？（前書き）

はい、三人目です。新しいキャラもでてきます。

四剣士の出会い？

「お風呂上りい。大輔、入っていいよお。」

はあ、サッパリした。

「いいの、姉ちゃん？」

弟の大輔が返す。

「いいよ。」

大輔がお風呂に入った事を知らせるシャワーの音がした。

「あれ、バスタオルが無い・・・。」

あわててお風呂場にバスタオルを探しに行く。

「あんなれえ、籠にも無い。」

もしかして洗濯機の中入れた？そう思い洗濯機の中を覗き込む。

何かが聞こえた。

『・・・者、剣を操る者・・・。パルスにおいてここに四剣士が集うとき。

パルスの勝利、永遠なる平和は確定される・・・。来るのだ、四剣士の一人よ。

聖賢王ジャムシードの御名において・・・。」

足が浮く感じがした。

「え？ちよっと、頭打っちゃう！！」

そのまま私は洗濯機の中に入った――――。――――。

「えっ、ちょっとなんでー！！！！」

「・・・あ。」

まだ瞼が重い。

「無理にあげなくても大丈夫ですよ。」
優しい女性の声がした。

ここ、病院？ 今のは看護婦さん？
そうだ、さっき洗濯機のなかに体突っ込んで――――。意識
とんだのか・・・。気絶したってこと？

眩しい。

光と戦い目を開けてみる。

そこは病院とは全くもってかけ離れた場所だった。

「あの・・・ここはどこですか？」

ためしに聞いてみた。

「ここはシンドウラ。シンドウラ国の国都ウライユールの王宮の中
でございます。」

国王ラジェンドラ様がパルス国の遠征の帰りに道に倒れている貴方
を見つけたようでして。

看病してやるように、と言われた所存にございます。」

「そうですか・・・。あの、ラジェンドラ陛下にお礼を言うことは

できますか？」

「ええ、頼んでみましょう・・・。」

そう言って女性は出て行った。

しばらくして女性が帰ってきた。

「『喜んで』とおっしゃってありがとうございましたわ。どうぞ、ご案内いたします。」

そのまま私は女性についていった。

「失礼いたします、先ほど陛下にお礼を賜りたいと申する者を連れてまいりました。」

「ああ、入ってもらってくれ。」

その声は若い男性のものだった。

女性が扉を開ける。

目の前に広がったのはどの部屋よりも豪華な室内。

何から何まで洗練された、と言わざるを得ない部屋。

思わず、息を飲み込んでしまった。

目の前にラジエンドラ陛下と思われる人がこれまた豪華な椅子に座っていた。

耳元で女性が囁いた。

「片膝を折って、忠臣の意味を表してください。これが通常でございます。」

私は言われたとおり、片膝をおって忠臣ということを見せる。

その瞬間回りがざわめいた。

隣の女性まで驚いたような表情をしている。

え？私なんか無礼を働いてしまった？

少しだけ話す声が聞こえた。

「素晴らしい。あんな洗練された身の動きをする人……。私は見た事が無いね。」

「そうね。きっとたくさんの人に頭を下げているんだわ。」

・・・洗練された？動き？そんな私はたくさん頭を下げてきたわけじゃないのに。

「お、恐れ入りますが、陛下……。」

私があわてて声を発するとラジェンドラ陛下が、

「そなたはどこから来たのだ？」

と優しい声で聞かれた。

「あ……。じ、実は私なぜここに来たのか分からないんです……。」

すると陛下が顔をしかめる。

そ、そうだよ。知らないっていったところで嘘って分かるよね。どうすればいいんだろう。

一気に回りから責められる。

「分からないだって？！そんなあやふやな事を言って我々に認めてもらえるとも思ったか！！」

「もしや、パルスからの刺客かもしれんぞ。」

その声一気に注目が集まる。

「その者が腰に差している剣は聖賢王ジャムシードの遺品だ。」

「それはまことか？」

陛下がたずねる。

「はい、まことでございます。その遺品には4つの種類がございます。細身の剣、長剣、短剣、そして普通の剣があり、その四剣士がパルスに集った瞬間、パルス

の勝利、そして永遠なる平和が得られると伝えられています。」
そうなのか……。ん？聖賢王ジャムシード、パルスの勝利、永遠なる平和……。

全てこの世界に来る前聞いたことだ。

私は言ってみた。

「あ、あのっ！私その言葉この世界に来る前に聞きましたっ！確かそれ四剣士とか言うものでは
ありませんかっ？！」

言った後私はしまった、と思った。これじゃ全くの逆効果じゃないか……。！！

「この者を牢獄で保管しておけ。」

ラジェンドラ王ははき捨てるように言った。

私の髪を兵士がつかんで引っ張っていった。

ガシャン！！

私の目の前で牢獄の鍵がかかった。

「もう、この世界に来て、何やってんだろう……。。」

ワケもなしに私は呟いた。

なんでよ！！なんでこんなことで牢獄なんかに入らなきゃいけないのよ！！

私はこの世界のこと何一つ知らないのに、なんでこんなことになるのよ。

私が牢獄に入れられてから一週間が経った。

牢獄を警備している兵士達からこんな情報が聞き取れた。

「おい、最近ここ（シンドウラの王宮）にパルスの使者が来たらしいぞ。」

「ほお、それは本当か。四剣士のことでも聞けばいいのにな。」
そして二人は私を馬鹿にするように笑った。

しかしそれが本当になったのである。

ありえない、と顔に書いたようなさっきの兵士が私の牢獄の鍵を開けて事情説明をしてくれた。

「今日パルスのからの使者が来てな、陛下がご親切にも四剣士のことを聞いてくださったんだ。

『こちらにも四剣士と申す者が一人おってな。どうにかしてくれんだろうか。』とお聞きになったんだ。

するとその使者が『私の国でも一人預かっております。』と答えたそう。

それでパルスがお前のことを預かってくれるというわけさ。」

え、パルスにも私と同じような待遇を受けた人がいるってこと？

でも良かった。これからは今までよりもましな日々になりそう。

兵士がラジェンドラ陛下（あんな奴に陛下って付けたくなんか無いっ！けど）がいる扉を開けた。

これで2回目だ。

「・・・ほう、嘘つき四剣士様のご登場だ。」

呆れたように陛下（だからあんな奴に陛下なんてつけたくないのにっ！！）

「やめてください、彼女をそんな風に言うのは。」

私は助け舟を出してくれたひとのほうを向いた。

その人がこっちを向いていた。

その人の周りの空気が揺れ動くような気がした。

「き、綺麗・・・。」

私は思わず口に出してしまった。

「そうじゃな、私は美しいであろう。」

さらっと言って返してくれた。

何もかもが綺麗だ。いわゆる絶世の美女というものだ。

しかも本人はそれを否定しない。その言葉が皮肉に聞こえないのが不思議だ。

ぽわーんとその人の事を考えていると美女が声を掛けてきた。

「自己紹介が遅れて申しわけない。私はフアランギース。ミスラ神に仕えるパルス国の女神官である。こちらでも四剣士が一人いるため、他の国にいないかとさがしてみたところ、おぬしがみつかったということじゃ。パルスにきてもらってもよろしいかな？」

「もちろんです！！もうこんなところ嫌です！いたくなんかありません！！」

思わず叫んでいた。

「おぬしがそんなにシンドウラを嫌う理由は何なのだ？」
フアランギースが聞いてきた。

「私は初めてこの世界にきました。来る前に声も聞こえました。分からないことだらけなのに、

この人達は私をパルスのスパイだとか言って・・・・・・！！」

「それでそなたは牢獄に入れられた。ということか・・・・・・。」

「・・・・・・。」

一気に体の力が脱力したように何も言えなくなってしまった。

「大丈夫だ。しかしラジェンドラ陛下に無礼を働いてはいけない。シンドウラ国はパルス国と同盟を

結んでいる国だからな。」

パルス国がこの最悪な国と同盟を結んでいる？ありえない。

「『ありえない』っていう顔をしているな。」

フツとファランギースが笑った。

「それでは、私たちは失礼させていただきます。」

それだけ言々とファランギースは私の手を引っ張ってこの部屋から出た――――。

「さて、帰るか。」

ファランギースはふわりと馬に乗ると、

「ほれ。」

と手を差し伸べてくれた。

私はその手を掴んでファランギースの後ろに乗った。

「さて、それではこの嫌な国から帰るといたそうか。」
そう言って馬を走らせた。

ふいにファランギースが言った。

「腰にちゃんと剣を差してあるか？」

あわてて腰の剣をまさぐる。・・・あった。

「あったよ。」

「そうか。一番大きい宝石の色はなんだ？」

剣に触れて見てみた。

綺麗な飛び切り大きい黄色の宝石が目に入った。

「黄玉トパーズみたい・・・。」

「そうか。パルスに今いる四剣士の一人は紫の宝石で細身の剣を所持している。そなたといい話し相手になるだろう。」

「女の子？」

「ああ、女性じゃ。」

「そうなんだ……。」

「そういえばそなたの名を聞いていなかったが……。」

「あ、私の名前は天宮可憐あまみやかれんといいます。」

「そうか。今からもう少し馬の速度を上げるからな、ちゃんと捕まっておれ。」

いきなり顔に当たる風の勢いが強くなる。

私たちはパルスに向かって馬に走り続けるのであった――――。

四剣士の出会い？（後書き）

どうでしたでしょうか？残すところ後一人。

どうやってこの世界に引きずりこもうか・・・（笑）

感想などお待ちしております！！

四剣士の出会い？（前書き）

最後、やっと最後の一人・・・！！ここまでよく頑張った、自分！！

次の話をどうしようかなあ、なんて考える姫ちゃん。

四剣士の出会い？

「ただいま。」

俺、橋本拓哉。はしもとたくや ちなみに高校二年生。

「おかえりなさい。」

母さんが言った。

階段を上がり、部屋に入る。

「ふう……。さあてつと……。。」

学校の鞆から筆記用具を出し、机に向かう。
勉強なんて偉いと思う奴がいると思うけど、でも俺の夢は難しいんだ。だから頑張る。

「ん……。消しゴムが無い……。？」

あわてて机の中を探す。

体が浮いた。

「あん？」

そのまま体が机の中に入っていく。

「ドラえもんかよー！！！！！！」

ドスン。

自分の体が地面に付いたような気がした。

これってもしかしてドラクエみたいな展開か？それは大歓迎なんだが。

だったら面白れー！！剣は？盾は？鎧は？そう思い自分の体を見てみた。

・・・剣しかない。でも剣は見事な装飾で、^{エメラルド}緑玉が一番目立っていた。

「へえ、^{エメラルド}緑玉か・・・。」

「その君、何をしている？」

振り返ると農民らしき男が。

言葉をかけられて俺は考えた。

今自分の手には食料も何も無い。何日かで飢えて死んでしまう。ここで俺の頭にいい案が浮かんだ。

「あの・・・住み込みさせてもらえませんか？あつ、もちろんタダとは言いません。」

お手伝いたくさんするので・・・なのでっ」

俺が言い終わる前におじさんは言った。

「それなら農作業を手伝ってもらおうかな。寝る場所、朝昼晩三食付でどうだ？」

「よし、その話乗ったあ！！！」

こうして俺はこのおじさんの元で住み込みをすることになったのである。

「おい！！畑を耕すぞー！」

「へい！！」

俺がここに来てから三日が経った。

もう農作業にも慣れたし、むしろ楽しくなってくるものである。

この頃俺はおじさんからある人の話をよく聞かされた。

その人は元ルシタニア騎士で、（ここはルシタニアというらしい）よくおじさんの元で農作業でよく尽くしてくれたらしい。

蛇王ザッハークの眷属である有翼猿鬼アラ・ヴィラーダを一太刀で切り倒したとか、もうそれは頼りになる男だったと褒め称えた。

俺はとてもそいつに会いたくなった。

「会う事はできないんですか？」

「うむ、何の因果かねえ、白鬼パラファーダはパルス国へ行ってしまった……」

「どうしてですか？」

「エステル卿について行っただ。あいつは一度記憶をなくしたことがあってな、そのとき

そんな白鬼パラファーダを助けてやったのがエステル・デラ・ファーンだった。

だからエステルが
パルス国王アルスラインに逢いに行くといったとき、白鬼パラフーダが進んで
エステルの
護衛役を買って出たのさ。その後はアルスラインの配下に付いたと
いう話だ。」

「俺・・・その人に逢いに行きます!!」
俺は思わず叫んでしまった。
なんか運命的なモノを感じるんだ。分からないけど。でも凄く逢い
たい!!!!

「お前まで行ってしまうのか・・・。」

「・・・スンマセン。でも逢いたいんです。その、エステル卿も。」

「エステル卿は死んだ。」

「どうして!!!!」

「エステル卿は紅い僧院ルージ・キリセエで壊疽壊疽にあい、アルスラインに逢いに行く
途中に
亡くなったのだ。まだ19歳になったばかりだった・・・。」

「・・・・・・・・!!!!」

彼女は死んでしまったのか。

「その時アルスライン陛下は・・・。」

「ああ、来た。それだけ二人の絆が強かったんだろう。」

「俺・・・やっぱりパルスに行きます!!」

「それでは——この食料と地図、いいか、パルスに行くときは必ず王都エクバターナへいくんだ。

分かったね？そこに白鬼パラフーダはきつという。馬はあげてやる。今日は泊まって明日

の朝出発しろ。」

「ええ、そうします。」

そしてここで過ごす最後の夜は過ぎていった———。

「仕度できたかー!!」

「ういっす!!」

「じゃあ、もう行って来い! 達者でな!!」

「おう、今までありがとな、おじさん!!」

馬にまたがった。結構揺れる。でもそのうち慣れるだろう。

こうしてパルスの地に四剣士は集うことになった。

しかしそのうちの二人はその事情を知り、二人は知らず、四人は馬で駆けていくのであった

—————。

四剣士の出会い？（後書き）

どうでしたでしょうか？ちょっと文が少なめ。

次は「光を貴方に・・・。」を投稿しないと。

忙しいなあ・・・。（もっと忙しい人もいるのに、何だらけたこと
言ってるんだろ）

引き続き、応援よろしくです☆

それと文章中に書いてあった「紅い僧院」ですが、その四文字で「
ルージ・

キリセ」と読めます。見たら僧院の上だけに「ルージ・キリセ」が
載っていたので。

四剣士が集うとき／前編／（前書き）

はい。とうとう四人をあつまらせるところまでできました。

でも前編、後編というふうに分けないと書けないんだよね、ながすぎて。

四剣士が集うとき〜前編〜

・・・どうも。俺はただいまパルスに向かっている一人。（二人なのか分からないが）

名前は小沢雷輝。みんな、覚えてるか？一週間食わせてもらったおじさん、おばさんを銀仮面らに殺されてそいつらの頭領はパルス人だったと聞いて、パルスに向かっているんだ。

・・・全く、嫌なもんだ。もう走ってから一週間以上経ってるのに、まだ着かない。

もしかして迷ってしまったか？でも地図ではこれが合ってるんだ。あと、少し・・・、らしいが。

馬も疲れてきてるし。どうしようか。

そんな中で馬を走らせていると声が聞こえた。

「おーい！！！！その君！！！！」

☆—☆—☆—☆—☆—☆—☆

俺がルシタニアから馬を走らせて一週間近く。全く、どこなんだ、

王都エクバターナ!!!!

すると反対方向からも若者が走ってくる。

こいつもエクバターナへ行くやつなのかな？

よし、話しかけてみよう。

「おーい!!!! その君!!!!」

すると若者が振り返った。

「なんだ？」

そういう声が聞こえた。

俺は叫び返した。

「お前もエクバターナへ行く一人なのか？」

「そうだが！」

「よければ一緒に行かないか？」

「だったらそっちに馬をつけるからそのまま走ってろ！」

そう言ってあいつは馬をだんだん俺の馬に近づけ、隣にピッタリつけた。

「お前はどっから来たんだ？」

俺は話しかけた。

「ミスルからだ。お前は？」

「俺はルシタニアからだ」

「そうなんだ……。俺、小沢雷輝。お前は？」

「……。橋本拓哉。」

「そうか、よろしくな。」

「お前はなんでパルスに行こうと思ったんだ？」

「お前じゃなくて、名前がいいよ。」

「ああ。……。それでなんでだ？」

「仇を討ちに來たんだ」

「仇？誰の？」

そうしてあいつはここに來た理由を明かしてくれた。

一週間食わせてくれたおじさんお婆さんがとつぜんの奇襲に合い、亡くなってしまい、

そこの頭領はパルス人だから、來たらしい。

「まあ、パルス人って誰もそんな性格なのか？って思ったのもある

けどな」

そう言って雷輝は苦笑いした。

「へえ、・・・変わってるんだな。」

「拓哉は？」

「俺は会いたい人がいるから来たんだ」

「ふうん。どういう人？」

「なんか運命的なのを感じるんだよな。なんていうの・・・。すんげーかつこいいんだ!!」

「・・・今どき高校生が運命っておかしくね？」

ポツリと雷輝がいった言葉が俺の笑いのツボをついた。

「「ギャハハ!!」」

俺達は大笑いした。こいつと仲良くなれてよかった。

☆—☆—☆—☆—☆—☆—☆—☆

「ねえ、フアランギース、パルスはまだ？」

「残念ながら、まだじゃ。」

私はあの最低なシンドウラ国からフアランギースに助けられてパルスに向かっている。

他にも3人いるんだよね。男子もいるのかなあ？カッコイイかな。

「……可憐。今から私は弓を使うから馬から落ちないようにしておくれ」

「……うん。分かった。でもなんで？」

「二人組の若者がパルス方面に向かってきている。何者かを聞いためじゃ。パルスに悪人は何人も受け入れられんからな」

そう言ってフアランギースは矢をつがえ、放した。矢は綺麗な弧を描いて二人のほうに飛んでいった。

☆—☆—☆—☆—☆

向こうの名前は橋本拓哉というらしい。でも話してみたら意気投合。水魚の交わりな関係になるかもしれない

い。

好きなTV、好きなアイドル、その他いろいろを話し合った。
すると――――。

「うおっ!!」

拓哉が急に声を上げた。

「どうした？」

「い、今矢が！」

見ると矢が地面に刺さっていた。

「と、とりあえず降参の意を表したほうがいいんじゃない？」

そういつて俺たちは両手を上げた。

向こうから馬が走ってくる。

その馬は俺達のところで止まった。

「そなたら何をしている？」

・・・げ、女じゃねーか。でもすんげー美人だ!!

横を見ると拓哉も呆気に採られたような顔をしている。

・・・でも、後ろにももう一人女がいた。

心臓が飛び上がったような気がした。

可愛い。不安げな表情でこちらを見つめている。
これがいわゆる一目ぼれというものなのか？

「あ、あの・・・」

俺は大人のほうの女に話しかけた。

「私の名前はファランギース。この子は可憐という。そなたらは四
剣士の中の二人では？」

☆—☆—☆—☆

馬をその二人のもとにつけた。

・・・私は一人のほうに目がいった。
秀才そうな顔。どこか上から目線みたいな瞳。

・・・私のタイプだ。カッコイイ。
そう思った。気になる・・・。
この人と話せたら、気持ちを分かり合えたらどんなにいいことだろ
う。

知りたい。

無性にそう思った。

「あ、あの・・・」

気になっているほうではないほうの人が私たちに話しかけた。

フアランギースが返す。

「私の名前はフアランギース。この子は可憐という。そなたらは四剣士のなかの二人では？」

「俺は橋本拓哉で、コイツは小沢雷輝。よろしくな」

へえ、拓哉君っていうんだ。いい名前。

「ふうん。そなたらの剣からして四剣士と認めてもいいだろう。どう思う、可憐？」

いきなり話を振られてあわてる。

「え、べ、別にいいんじゃないかなあ?!」

「そうか。ではパルスへ参ろう。」

そうして私たちはパルスに向かった。

二日後。

「つ、着いた・・・・・・・・」

もうフアランギース以外のみんなはへろへろだ。

「疲れた・・・・。」

「休みたい・・・・。」

「よし、あと少し。陛下に謁見をもとめて今日は休もう。さあ、付いてくるのじゃ」

こうして私達は陛下に謁見を申し出たのであった。

四剣士が集うとき〜前編〜（後書き）

どうでしたでしょうか？次話をお楽しみに！

四人が集うとき（後編）

ああ、目の前にパルスの国王がいる。

緊張して心臓が飛び出そうだ。隣を見ると拓哉も同じく顔が固まっている。

そして……。

ああ、なんて可愛いんだ、確か名前は……可憐っていったな。横顔も国王に対する真摯さで輝いている。

「そなたらは四剣士として名前を聞いている。こちらでも一人来ているから今紹介しよう。

ダリユーン、彩香を……」

「かしこまりました」

黒衣の騎士がそう言って出て行った。

しばらくすると声がだんだんと近づいてきた。

「ちょっと、何なの、ダリユーン。いきなり……」

その声は反感を覚えてはいたが、どこか嬉しさも混ざっているようだった。

「他の四剣士が来てくれたんだ。それで今お前を紹介する。さあ」

バン！と扉が開いて入ってきたのは可愛らしい女の子だった。でもあまりタイプではない。

☆―☆―☆

入ってきたのは女の子だった。それもかなりの美人。胸がどきん、とした。なんなんだ、この感じ……。

「この子が紫の細身の剣を持っている小梨彩香だ」

彩香は驚いたようにしていたが、

「みんな……彩香です。呼び捨てで呼んで頂戴。よろしくね」とだけ言った。

「四人に来てもらったのには理由がある。ジャムシードの遺言によれば四剣士とパルスの真の国王がパルスの地に集ったとき、蛇王ザッハークを亡き者にできると……。

私が真の国王かは分からないが、パルスの民のため、できる限りのことをしたい」

感心して拍手を送ってしまった。国王は顔を赤らめて「……ありがとうございます」
とだけ言った。

☆―☆―☆

パルスの国王はもの凄く若かった。私達とあまり年齢が変わらないくらい。

しかもけっこうこのイケメン。私はこの人のためなら、と決心を固め

た。

「まず、お互い仲良くなってくれ。詳しい話はそれからだ。一回、解散しよう。」

また集まるときは、ギーヴ、行ってくれるな」

すると若い旅の楽士のような人が

「……おやすい御用」

と歌うように言った。

「部屋を案内させる。それでは」

と国王は言い、姿を消してしまった。

「それでは私が案内しよう」

そう言い出したのはさっきおやすい御用と言った、ギーヴであった。

「国王の名前は何なんですか？」

私は気になって聞いてみた。するとギーヴはこっちを向き、

「おうおう、けっこういけるほうではないか……。しかし私の本命はフアランギース殿なんだ、

深入りしてはいけないし、まだまだこの子達の未来を奪っていかん」

そんなことをつぶやいて、こう言った。

「国王の名前はアルスラインであらせられる。とても公明正大で、素晴らしいお方だ」

「へえ……」

「さあ、ここがおぬしらの・・・いや、男の者は隣の部屋である。さあ、行くがいい」

私と彩香は部屋の中に入り、男子達は隣の部屋に入った。

「まあ、俺が呼ぶまでは四人一緒にいてもいいだろうし、男女二人きりで好きなことをしてもいい。それでは」

とギーヴは妖しい笑みを浮かべて歩き去ってしまった。

☆―☆―☆

「・・・とりあえず、自己紹介しない？」

私は言った。ただここで黙ってても楽しくないし。

「じゃあ、部屋の中で」

男子の一人が言い、女子の部屋に入った。他の人もそれに習う。

「・・・私はさっき国王様が話してたと思うけど、小梨彩香よ。よろしく」

「俺は小沢雷輝です。青の長剣を所持しています」

「俺は橋本拓哉。緑の・・・なんか普通の剣だな、みんなのと違って」

すると隣の雷輝が笑った。

「私は黄の短剣を所持している天宮可憐といいます。よろしくね」

こうして四人はパルスの地に集ったのであった。

四人が集うとき〜後編〜（後書き）

やっと四人が集まってくれた・・・！！！！

集まらせるのに一番苦勞した奴は誰かね？！パルスに行くのに頑張った四人も

そうだけど、一番は四人をこの地に集まらせた作者だろう！

どうなんだ！全く。（誰に対して怒ってるんだ、バカヤロー）

嵐の前

握手をした後フアランギースが入ってきた。

「どうじゃ、仲良くなれたか？」

四人が頷くと、フアランギースは自分の剣を取り出して言った。

「剣の練習をしてみないか？」

お互い顔を見合わせる。

「あの・・・やりたいな」

手を上げていったのは彩香だった。

「じゃあ、俺も」

拓哉が賛同する。

「私もやってみたい！」

可憐も剥きになって言った。

「今後のためにも、な」

雷輝が最後に言った。

「それではやってみようか。競技場へ行くでしょう」
こうしてフアランギースを先頭に歩き始めた。

「私にできるかな？」
可憐が言った。

「できる。私も最初は何も知らなかった」
フアランギースが微笑して言う。まるで女神のような美しい笑いだ。

「俺も心配だ」
雷輝が言った。

「大丈夫じゃろう。そなたらは気骨のある若者だからな」

「良かった」

「さあ、着いたぞ」

「私はもう少しやっているけれど、混ぜてもらってもいい？」
彩香が言った。

「全然いいよ！ねえ、雷輝！」

いきなり話を振られた雷輝はあわてた。

「え？あ、ああ、そうだな」

競技場は大きなホールという感じで真ん中に戦う台がある。

「広いんだな」

拓哉が感心したように言った。

「ええ……」

彩香はそう応えた。

「さて、それでは早速やってみるとするか」

フアランギースが剣を抜き、台に上がった。

「彩香、手を貸してくれるか」

彩香は他の三人より少しだけ早く武術を習っている。
当然の選抜だろう。

「いいか、まず剣を交差させるところからスタートする」

フアランギースと彩香がゆっくり剣を交差させた。

「これを何回も繰り返す。できるな？」

「うん」

他の三人は勢い良く応えた。

簡単に見えるものの、相手と何回も何回も剣を打ち合う。
めんどくさいとも感じるし、そう思っていれば、相手から剣が飛ん
でくる。

それに慌てて気づき、自分も返す。その繰り返しだった。

「終わり!!」

フアランギースがそう告げた。

「疲れたじやろう。少し休憩をとってからまた練習を再開する」

その言葉を合図に四人は床の上に崩れ落ちた。

「はあゝ。つ、疲れた……」

女子は言葉に出すものの、男子はゼイゼイと喘いでいるだけだった。
休憩はたったの10分間。

「それでは続きをやろう」

フアランギースは言い、剣を抜いた。

「今度は決め技のようなものじゃ。打ち合いながら相手の命を狙う
タイミングを計る。
そして……」

フアランギースは雷輝の胸の前で剣を止めた。

「今やるのはさっきやった打ち合いをしながら決め技のタイミング
を計って、

その時が来たと思ったら決める。相手はそれをいつ来るかと待ち構
え、上手く

対応できるかどうか。ちゃんと剣は寸止めだ。それは分かっておる

な？」

ファランギースが射るような視線を向けた。

「もちろん。それは仲間と戦う上で大事な事だと思う」

雷輝が呟いた。

「そうじゃ。それではまず男女別々で打ち合いをし、その後男女混合でやる」

四人は彩香と可憐、雷輝と拓哉というように別れ、打ち合い始めた。
キン、キン。刃鳴りの音が競技場に響く。

まずは可憐の攻めだ。

彩香はいつかいつかと待ち構える。

男子側は拓哉の攻め。
守りは雷輝だ。

「・・・・・・・・っ」

可憐が無言のうちに決め技を彩香に打ち出す。勿論、寸止めすることとをひっくるめて。

彩香はいち早く気づき、体を横にしてかわした。

拓哉も隙を与えず、次々と繰り出していく。
雷輝もいつ来るかとヒヤヒヤだ。

拓哉が次の瞬間、雷輝に剣を振り下ろした。
雷輝は剣を自分の剣で受け止め、横に流した。

「そこまで！」

フアランギースが叫んだ。

「可憐、拓哉、良い攻めだった。彩香、雷輝、良い受け流し方だったぞ。」

彩香のようにかわす暇があるのならよけてもいいし、雷輝のように剣で受けとめて横に流すなりしてもいい」

なるほど。四人はふむふむと頷いた。

「次は反対で可憐が守り、彩香が攻めだ。それで拓哉が守り、雷輝が攻め。」

それでは………始めっ！」

彩香が勢い良く可憐に剣を振りかざす。

不意を突かれた可憐は受け止めたが、力が弱くて剣が地面に落ちてしまった。

そして彩香は可憐の首の手前で剣を止めて、降ろした。

「はあ………参ったわ」

可憐が全身の力が抜けたようで床にへナヘナと座り込んだ。

「なるほど。最初に不意を突いて攻撃するのもありだな」

ファランギースがボソツと呟いた。

一方男子達の決戦はまだ終わってはいなかった。

決めようとしては防がれ、攻めようとしては守られ。

拓哉はズルい方法だが効率的な方法を使った。

まず決め技をする振りをする。

雷輝が思わず受け止めようとするがその前に拓哉は別の動きに移っていた。

雷輝は突然のことに驚いて拓哉の剣に弾かれて剣が地面に落ちた。

彩香と拓哉の手口こそ違うが、剣を落としたのは間違いない。

「止め！」

ファランギースがいった。

「次は男女混合だ。少し休んだ後、再開する」

ファランギースがそう言い終わった瞬間、競技場に誰かが入ってきた。

「誰かと思えば、ダリユーン殿か」

ファランギースが笑いながら言った。

彩香は顔を赤くしてダリユーンから視線をそらした。

拓哉はそれを不安そうに見ていた。

もしかして彩香はダリユーンのことを好きかもしれない。
そんな思いが心の中に湧き上がった。
そんなことない。拓哉は心中で否定した。

「ど、どうして来たの？」

彩香が顔を赤くしたまま聞いた。

「何だよ、俺が来ちゃいけないのか？それとなんで顔が赤い？熱でもあんのか？」

ダリユーンが不思議そうに彩香の顔を覗き込む。
彩香はさらに顔を逸らす。

「な、別に熱なんか……………」

「おい、あんのか？」

「無いってば」

「もしかしたらあるかもしれないな。行こう」

そう言ってダリユーンは彩香をお姫様抱っこして歩いていった。

「ちょっと、やめてよ……………」

「だって熱あるんだろ」

「だから……………ちょっとー！！！！」

だんだん彩香の叫び声が遠ざかっていき、そして消えた。

拓哉は呆然としていた。まさか好きな人が連れ去られるなんて思っていなかったのだ。それ以上に悔しかった。しかし武術の先輩に逆らうわけにはいかない。

「くそっ・・・・・・・・」

拓哉は剣を地面に投げた。

「拓哉・・・・・・・・」

可憐が不安そうに見つめる。

可憐も気になっていたのだ。ダリユーンが彩香を連れ去った後に拓哉が剣を投げる。

その行動がとても気になった。もしかして拓哉は彩香のことが好きなんじゃないかと。

そしてまた雷輝も可憐の様子に気をとられていた。

可憐は拓哉のことが好きなのではないか・・・・・・・・。その不安が頭から離れなかった。

四人は、それぞれの恋の予感、不安を感じ始めていた。

嵐の前（後書き）

は、話の区切りがちょっと・・・。。
下手ですね。それ以上に文章長っ！

嵐吹き荒れて

「ちょっと、熱はないって言ってるでしょっ！」

彼女らしくない慌てっぷりで、ダリユーンの体を蹴飛ばそうとする。

ダリユーンは自分の部屋に連れて行き、彩香をベッドの上に降ろした。

「もう、何なの………？」

彩香が怒ったそのとき、ダリユーンの掠れた声が彩香の耳に入ってきた。

「………理由があるからに決まってるだろ………」

彼らしくない。彩香はそう感じた。いつもは正々堂々としているダリユーンが今は、ただ何かに怯えているようだった。手で頭を抱え込んでいる。

「どうしたの………？」

もしかして軍事機密のことかな、と軽く思っていた彩香はダリユーンの言葉を聞いて、ビクビクして、頬を赤らめた。

「つまりだな………。ああっと、えええと、……彩香のことが好きなんだっ!!！」

ダリユーンが投げやりに言った。

「え．．．．．っど？」

「．．．．．」

「え、そうなの？」

口調はもっと驚いていいはずなのに、まるでそれは当たり前、のよ
うな口調で彩香の言葉が
紡ぎ出されていく。

「聞こえてんだろ」

「うん．．．。そうだけど」

「どうなんだよ？」

ダリユーンはいつもの勢いを取り戻したらしく、しゃがみこんでベ
ッドに座っている彩香と
目線の高さを合わせて聞いた。

「．．．．．えっと」

しどろもどろになる。

「．．．．．？」

「私も好き．．．．．です。うん」

なんとか平常心を保ちながら言うと、ダリユーンは立ち上がり、彩

香を包み込むようにして抱いた。

「ダ、ダリユーン……」

「良かった」

ダリユーンは微笑むと、

「ありがとう」

と言ってスタスタと歩いていってしまった。

恐ろしいほどの静寂————。

自分の心臓の音が大きく聞こえた。

心は嬉しい気持ちで一杯だった。可憐に一番に告白しようと思った。そう思いドアを開けて四剣士の部屋へと向かった。

少しずつ部屋が近づいてきた。

ドアを開けようと思ったとき、後ろから声がした。

「彩香？」

振り返ってみる。そこには拓哉がいた。

☆—☆—☆

辺りを見渡すともうすでに夜になっていた。

「拓哉？どうしたの？」

彩香はちよつとだけ首を傾げて言った。

その動作も拓哉にとっては愛らしく見えるのである。

「実はさ……」

拓哉が話を切り出す。

「うん」

「好きなんだけど」

その時、男子の部屋の中でヒクッという声がしたように思えた。

「うん……ってえっ?!」

「好きなんだけど」

拓哉が同じ言葉を繰り返す。

彩香の思考回路は完全に停止してしまっていた。

一度好きな人から告白されてルンルン気分だというのに、友達の人から告白を受けるなんて。

驚いたと同時に頭を金槌で打たれたようなショックもあった。

「…………ごめん」彩香が口に出したのは断りを表す言葉だった。

「やっぱりな」

拓哉は笑いながら言った。苦笑い。

「えっ？」

「さっきダリユーンに連れ去られたとき彩香凄いムキになってたから。」

ダリユーンのことを好きなのかなー、と思って。やっぱりそうだった」

「うん。そうなんだ。ごめん……」

彩香が頭を下げて謝ると拓哉は手を振って、

「別にいいよ」

と言った。

「あ、でもこれからよろしくね」

彩香は控えめに付け加える。

「ああ」

拓哉はバイバイと手を振って消えていった。

彩香は呆然と突っ立ってることしか、できなかった――――。

☆―☆―☆

その頃可憐と雷輝は男子の部屋にいた。

可憐が雷輝に剣の振り方を教えて欲しい、と頼んだからである。

本来は競技場へ行って練習すればいいのだが、生憎、パルスの軍隊が戦いの練習をしていたので

部屋でやることになったのである。

雷輝は幸せを噛み締めているようだが、可憐は浮かない顔色だった。

というのもさっき彩香がダリユーンに連れて行かれたとき、拓哉が凄く苛立っている気が

してならなかったのである。剣も投げたのだから。

雷輝はさっきの不安は気のせいだと認識して忘れようとしていた。

ふいに――――。

「彩香？」

拓哉が彩香の名を呼ぶ声が部屋の外で聞こえた。

「拓哉？どうしたの？」

彩香が不思議そうに聞き返す。

「実はさ………」

「うん」

まさか――――。

「好きなんだけど」

そのまさかだった。思わずヒクツと声が出てしまう。彩香に聞かれてしまっただろうか。

雷輝も二人の声を聞いたらしく、耳をそばだてている。

「うん……って、えっ?!」

彩香の憤慨する声が聞こえてくる。

いやだ。言わないで。それ以上。

「好きなんだけど」

拓哉がもう一度繰り返す。

少しして――――。

「……ごめん」

彩香に小さな声が聞こえた。とりあえずホッとした。でもそれ以上に悲しかった。

可憐は手にポチャリと何かが落ちる音を感じた。涙だった。

雷輝は驚いた顔でこちらを見つめている。

雷輝もさっきの予感が現実だということをひしひしと感じ始めてい

ただ。

そして確信したのは可憐が涙を零したとき。思いの届かない拓哉に向かったの、
涙だった。その思いは自分もだ。

可憐は涙に気づき、止めようとしたが、止めようとすればするほど溢れてくる。

しまいには雷輝の前だというのに泣きじゃくってしまった。
なにやってるんだろう。よりによって雷輝の前だよ？なんで泣いてるの？

その時自分の体を誰かが包んだ。雷輝だった。

「泣いてもいいんだよ」

雷輝が優しく言った。そして可憐の頭を撫でた。

「うつ・・・！！」

可憐が雷輝にしがみついた。誰でも良い、誰でもいいからすがりついて泣きたかった。

誰か私のことを受け止めてくれる人・・・・。それが雷輝だった。

雷輝は泣いている可憐を見て我慢できなくなった。

思わず抱きしめてしまった。好きな人が困っているのを無視できなかったのだ。

「泣いてもいいんだよ」と言ってしまった。でもあれは本心だ。

愛しい人が苦しんでるとき――、自分に何かできないかと思った。
その苦しみを分け合えたら・・・。

それだけでも、自分の心は軽くなる。

みんな、そうなのだ。きっと。

嵐吹き荒れて（後書き）

この話はけっこう上手くいったかなと自慢気味の姫ちゃん（笑）

それぞれのスタート

「あつと・・・・・・・・」

一日に二つに告白を受けた彩香は親友である可憐を目で探した。
どこに行ったんだろうか。

それからすぐに諦め、女子部屋に入っていた・・・・・・・・。

☆―☆―☆

雷輝はまだ可憐の小さな体を抱きしめていた。

悲しみに震える体が愛しい。さらに雷輝は抱きしめる力を強くした。

少しして可憐が雷輝の体を少しだけ押した。

二人は離れた。そして見つめ合う。

「なあ・・・・・・・・俺じゃ、駄目か？」

考えるより先に口に出ていた。

可憐が水を求める魚のように口をパクパクさせた。

雷輝は真摯に言った。

「俺は裏切ったりしない。いつでも、お前が一番だ。ずっと会った時から、お前のことをずっと見て・・・」

「・・・・・・・・」

「お前が拓哉のことが好きなのはさっき知った。だから・・・」

「私の願いはもう叶わないの！だって拓哉が彩香を好きだから！！でも彩香にだって好きな人はいるの！！だから今彩香は断った！そうでしょ？！そうなんでしょ？！」

可憐が狂ったように叫び床に崩れ落ちた。

「分かってる！！分かってる！！そんなこと！だけど、 فقط！」

「もう止めろよ！」

雷輝が可憐の腕を掴み、無理やり立たせた。

「俺だって・・・そうなんだよ・・・。お前と、同じ・・・」

可憐は怯えたような視線を雷輝に送る。

雷輝は力強い瞳で見つめ返した。

そのまま2、3分。時間が過ぎた。今の段階では睨み合うといったほうが正しいかもしれない。

ふいに可憐はさっき送っていたものとは違う視線を雷輝に送る。

雷輝は最初気づかなかったが、可憐が自分に向ける視線がさっきのものと違うということを

感じた。それはだんだん喜びへと変わっていき・・・。

思わず可憐をまた抱きしめた。

可憐が幸せそうに微笑む。服の襟をキュッと掴んだ。

「好きだ、好きだ、好きだ・・・っ!」

雷輝が同じ事を繰り返す。

可憐は恥ずかしそうに頬を赤らめた。しかしどこか嬉しそうにも見える。

「付き合ってくれるのか・・・？」

雷輝がまだ不安を含んだ表情で問いかける。それに可憐は頷いて応えた。

もう二人とも気持ちが抑えきれなくなった。

そして、二人はその気持ちを開放するように優しくキスをした。

☆―☆―☆

その頃振られた拓哉はトボトボとほっつき歩いていた。

「あーあ・・・」

ブラブラと体を垂らしながらどこ行く宛もなく・・・。

「カッコ悪い・・・」

俺は好きな人というのを持った事がなかった。

向こうからは迫られても、応えてやる事ができずにいた。

好きでもない奴と付き合うのは自分のプライドが許さないような気がするから。

その俺が、恋をした。

日本の四人が選ばれ、このパルスに集まった。

その中で恋も発展した。

勇気を出して告白したはずだったのに、ボロ負けだ。

この世界に来てからの『恋』は一生頭に焼きつくであろうに。

一向に諦められないのかもしれない。

そんな事を思っただけだと目の前の視界が黒くなり、風を感じた。

ベランダに出たのである。

「綺麗だ・・・」

今日は星が良く見える日なのであろうか、それとも毎日この場所は美しく見えるのだろうか。

「あの・・・」

振り返ると、知らない女性がいた。

思わず警戒心から剣を抜いてしまう。

「ああっ！お止めください！私は侍女でございます」

よくよく見ると侍女のような格好をしている。

「脅かせないでくださいよ・・・」

「ごめんなさい。貴方様のお邪魔をするつもりはなかったのですが・
・」

「ああ、それなら良かったです」

「敬語でなくて構いませんよ？」

「じゃあ、そうさせてもらおうよ」

拓哉はため息をつき、ベランダに腕を乗せ、体重をかけた。

「ここはいつ見ても星が綺麗なんです」

侍女が話し始めた。

「へえ・・・」

「だから私、毎日ここに来ています」

侍女も星を眺めた。彼女の瞳孔に星が写った。

拓哉はチラりと隣の侍女の顔を見た。

どこことなく愛嬌のある顔立ちで、彩香に似ているような気がした。そう思った瞬間胸が締め付けられるような感覚を味わう。

「あの・・・なんかありましたか？」

侍女が心配そうな顔をしている。

「いや、なんでも」

本当はなんかあったが、言うわけにはいかなかった。

「ああっ!!」

侍女がいきなり声を上げた。

「何だ？」

煩いとばかりに反応する。

「もう戻らなくては!!」

侍女が拓哉を背にくるりと振り向き、走り出そうとする。

「おい!!」

拓哉が侍女を呼び止めた。

「はい・・・？」

侍女が返事をする。

「名前はなんていうんだ？」

「アイーシャと申します。アルスラーン陛下にお仕えする身でございます」

「そうか。アイーシャ。覚えておくよ」

「光栄です・・・。あの、貴方様の名は・・・」

「最近四剣士っていうのが来ただろ。その中の一人で拓哉っていうんだ」

「かしこまりました。拓哉様ですね」

そう言い、アイーシャは走り去っていった。

四人は女子部屋、男子部屋に別れて、それぞれ眠った。
気まずいのもあったからの結果なのだろうか。

それぞれのスタート（後書き）

というか雷輝と可憐、キスするの早っ！

拓哉も不思議な侍女、アイーシャと出会い、何かが変わっていく・・・。

そんなお話を書いていきたいな。

女子部屋の朝

次の朝。

「ふわゝあ・・・・・・・・」

可憐は伸びをして起き上がり、チラリと隣で眠っている彩香のほうを見た。

何気に気まずい。彩香は何も知らないだろうけど、私は・・・・・・・・。

「ん・・・・・・・・」

彩香が起きそうだ。可憐はあわてて外に出た。

「ここって朝でも綺麗ね・・・」

可憐はそう呟いた。

山々を眺める。しかしその山は邪気を発しているようであり好まない。

しかし朝特有の澄んだ空気が可憐の肺を満たし、正直な気持ちになる。

「彩香に言おう・・・・・・・・」

やっぱり。このまま黙っているのは友達として彩香に悪い。もし今話さなくても、後でバレたら困った事になる。

「可憐？」

振り返ると、彩香がたっていた。

「わっ！！！！」

今の声、聞こえなかったかな？
それしか頭の中になかった。

「どうしたの？」

彩香はまだ寝ぼけ眼だ。

「あのね、話したいことがあって……」

可憐がまじめな顔で言ったからか、彩香はシャツと背筋を正して
こちらのほうを見つめた。

「実は、ね……」

可憐はそこまで言って考えた。本当に言っているのかなあ？
ええい。もう言っちゃえ！当たって砕けろ。

「拓哉のことが好きで、それで雷輝に告白されて、雷輝と付き合う
ことになったの」

「そ、そうなの？」

彩香の瞳が驚きで大きく開かれる。可憐は続けた。

「拓哉が彩香に告白されて彩香に嫉妬しちゃったの。でも、彩香は断ってくれたんだよね。」

「ごめんね。勝手に誤解しちゃって……」

「そこまで言ってくれたんだから、私も言う」

彩香は息をスウツと吸い込んで言葉を吐き出した。

「私は、ダリユーンのことが好きなの。昨日ダリユーンに連れ出されたでしょ。」

その時に、告白を受けて……。付き合うことになったの」

「ええっ!!」

可憐が大声を上げる。彩香は人差し指を口に当てて、「シート」と言った。

「まだ朝早いだから、みんな起きちゃうよ!」

「あ、ご……ごめん」

可憐はなんか朝から謝ってばかりだな、と思いつつ話を進めた。

「拓哉は一人になっちゃったね。なんか可哀そう。だけど彩香と付き合えともいえないし」

「ダリユーンは……。多分私のことはあまり考えていないと思う

わ。好きでも、あの人の頭の中はいつも国王様のことで一杯よ。ダリユーンは恋人より、軍事関係のほうが優先的なの。そこを含めて、私はダリユーンのことを好きになった。だから拓哉に寝返りはできないわ」

「そっか……。寂しくない？」

「うん。仲間がいるから、それだけでいい」

彩香の根強い返答に可憐はホッとした。

「良かった……」

「ねえ。今、何時かしら」

可憐が唐突に言った。

「さあ……。時計見てくる」

そう言って彩香は部屋に中に戻った。

2〜3秒……。

「六時半」

「え、六時半?!」

「早いのか遅いのか分からないわよねえ」

「多分、早い……んじゃない？」

「昨日教わった剣術でも練習しない？こんな朝早くだったら、誰もいないと思うし」

「そうだね！体慣らし！」

そう言って彼女たちは自分の部屋に戻って服に着替え、剣を持って競技場へと駆け出した。

――競技場――

彩香と可憐は同士に競技場の扉を開けた。

すると中には――――。

「雷輝?!」 「拓哉?!」

女子達の声が重なる。

視線の先には――――。

雷輝と拓哉がいた。

女子部屋の朝（後書き）

今回はちょっと短め。男子バージョンも書くからね。

偽者な試合〜一日目〜

i 6 2 9 6 — 8 3 1 「おはよう。お前らもう起きたのか？」

「拓哉たちには言われたくないんだけど。いつからここにいたの？」

呆れ顔で彩香が言った。

「んー、一時間前から。なかなか眠れなくてさ。それで今日から七日間剣対決しないかって

雷輝と言ってたんだ。彩香たちもやんない？」

「へえ、面白そうだね。どうするの？」

可憐が彩香より早く反応を示す。拓哉は嬉々として内容を話し出した。

「一日一回戦って勝ったほうに1ポイントやるんだ。で、七日間やって点数が高かったほうが

勝ち。で、最終的に勝った女子と男子が対決して一番強い奴を決めるってワケだ。で、今

お前達を起こそうかな、って思ってたらお前らが来たってこと。どう？ やんない？」

「面白そうじゃない！ その誘い乗ったあー！！」

「いいんじゃない。ワクワクする」

二人の了解を得て雷輝は手をこすり合わせた。

「さあて。じゃあ、朝一番の勝負。一回目をやろうぜ！」

二つの台にそれぞれ雷輝と拓哉、彩香と可憐が立った。
シャラ・・・ンと鞘から剣を抜く音がした。

「行くわよー！！！」

可憐が彩香に勢いよく飛びかかる。

彩香は笑みを浮かべてから持っていた剣で可憐の剣をなぎ払う。

「さて、俺等もやろうぜ」

雷輝が拓哉の周りをぐるぐる回る。獲物を捕まえる野獣のように。

「目が回るんじゃない？」

拓哉が雷輝の動きに合わせて回り始める。

「けっ！」

雷輝は回る動きを止めて、剣を構えて、突っ込んでいく。

キン、キンと刃鳴りの音がする。

女子はこれといった決め技をすることもなく、お互いに剣を叩きつ

けるような感じで、
試合は動いていた。

男子達は拓哉が雷輝の重い剣を思いっきり自分の剣ではじき飛ばし、
剣を拾おうとした
雷輝の首に剣を向けた。

「・・・今日は俺の勝ち、だよな？」

拓哉が視線が女子のほうに泳がせながら聞いた。

「まあ、まだまだ時間はあるよ」

と雷輝は返事になっていないような、なっているような曖昧な返事
をして終わった。

一方、女子のほうはというと――――。

（（決め技ができないわ））

二人は同じ事を考えていた。

（（チャンスができないのでは、困った事になるわね））

（（よし、無理やりにでも隙を作らせてやるっ!!））

可憐は勢いよく剣を彩香のほうに突き出し、彩香は思い切りよけた。

（（し、しまったあ!!））

二人は両方とも隙を作ってしまった。

（（ヤバイ、ヤバイ。早く反撃しなきゃ・・・））

二人は剣を相手のほうに突き出した。しかし、両方とも外れて剣に気を取られていた二人は一気に転んだ。

「・・・おいおい、もうやめたら？」

雷輝が呆れて言った。

「剣に体重かけてたのか・・・」

拓哉もやれやれと首を振る。

「「おい。もう10分以上経ってるぞ。もうすぐ朝ごはん・・・」」

拓哉と雷輝が同じ事を言いかけたとき、キツイ答えが返ってきた。

「「黙って!!」」

「「うげえ。何分付き合わせるつもりなんだあ・・・?」」

結局試合は朝ごはんだとギーヴが呼ぶまで四人を呼ぶまで終わらなかった。

しかし、最後は彩香が勝ち、一日目は幕を閉じた。

偽者な試合〜一日目〜（後書き）

これからは二日目〜七日目まで書くので、一話がとても短くなりま
す。

話が動くのはこれが終わってから。

偽者な試合〜二日目〜

「さて、二日目だね。頑張ろう！」

可憐が朝ごはんを食べているときにそう言う。

「……勝ってやるぞ」

拓哉雷輝を睨みつけた。

「へいへい」

雷輝は軽く受け流した。

「……よし、と」

彩香が剣を磨き終わり、立ち上がった。

「彩香、剣を砥ぐのが早いんだよ。少し待って」

「解った」

可憐は、磨く。短剣でも、利点はたくさんあるぞと思いながら。

「まだ？」

少ししたら、彩香のいらついた声が上から降ってくる。

「ご、ごめん……」

あわてて可憐は剣を鞘にしまいこみ、彩香のとなりに沿って歩いた。

「なぜ私達はこの世界に来てしまったのかしら……」

彩香がふいに呟いた。

「でも、不自由はしてないわけだし、使命を果たせば、ね」

「そう……なのかしら」

二人は自分自身の感情に迷っていたとき、競技場についた。

「さて、今日もくれてやるわよ」

彩香が剣を払って言った。

「誰がもうもんですか!」

可憐が言い返し、剣を抜いた。

激突、刺突、その繰り返し。

「くっ・・・」

彩香が押され気味のようにだ。

「まだまだ!」

可憐は突っ込んでいく。

いくら時が経っただろうか。まだ彩香と可憐は剣を交えていた。

二人とも長期戦に慣れていないのか、ゼイゼイ、ハアハア、と喘いでいる。

剣術は互角。俊敏さのほうでは可憐が勝り、技術性のほうでは彩香が勝っている。

どちらが勝つか。

可憐があらん限りの力をこめて彩香に斬り付けた。

彩香は体力の限界とばかりに剣を落とした。

可憐は彩香の体の前で剣を寸止め。

「今日は私の勝ち♪」

勝ち誇る可憐に彩香は悔し紛れに言った。

「今回は体力の差で負けたただけなんだからね」

「弁解しても無駄ね」

そして彩香は落とした剣を拾い上げ、可憐と向かい合って一礼した。

「「ありがとうございますっ!!」」

☆—☆—☆

——夜。

このとき二人の男子が廊下を歩いていた。拓哉と雷輝だ。

「女子は昼にもうやったらしいぜ」

拓哉が言った。

「今回は可憐が勝ったらしいな」

雷輝はここぞとばかりに彼女の自慢話をする。

「オイオイ、なんで俺に言うんだ？」

拓哉は呆れて雷輝を見た。

「分かるだろ？好きな子の自慢をしたいって気持ちさあ」

雷輝はウツトリして言った。

「こいつ、こんな一面あったっけ」

拓哉はボソツ、と言った。もちろん雷輝に聞こえないよう配慮してである。

しかし、

「何が？どんな一面？」

と返してきたので飛び上がってしまった。まさか聞こえているとは思っていなかったのだ。

「……いや、彼女思いつて言う一面」

「そーか？」

実際には彼女に溺れているという一面のことを指したのだが。

「さあてっと。やりに行こうぜ！」

雷輝が走り出した。拓哉もついていく。

「それでは」

雷輝と拓哉は向かい合い、一礼した。敬意を表してのことである。

拓哉は切りかかった。早く勝ちを収めたかったからである。

「そうはさせねーよっ！！」

雷輝がそうはさせじと手を回転させながら拓哉の剣を弾き返す。

（使うべきだろうか）

拓哉は考えていた。

そう、拓哉は雷輝に勝つため、裏の練習を重ねていたのだ。

その戦術は『一閃』。

一太刀で相手を切り殺してしまう、恐ろしい武器。

雷輝は誘いをかけるように拓哉にかかる。

（なんかやってみろよ。決めの技を！）

（出してほしいか。ならば出してやるっ！）

思ったと同時に拓哉は行動に移っていた。

回転。勿論雷輝の体を避けるようにしてである。

雷輝は驚いた。そして強い一閃に自分の剣を絡め取られてしまった。

「…………お前、いつの間にそんな技を…………」

絶句する雷輝を前にふんぞり返る拓哉。

「ヘッ！練習した甲斐があったぜ。今回は本気じゃないから一発で

殺せなかったけど、
もし相手が敵なら一発で切り落としてるぜ！」

こうして、二日目は終わった。結果としては女子は1対1で、男子も同様である。

偽者な試合〜二日目〜（後書き）

遅くなって申し訳ありませんでした（泣）
地震の影響でなかなか投稿する機会が得られず。

偽者な試合〜三日目〜

キン！キン！

刃がぶつかりあう音がする。穏やかなような鋭いような。

さて、今日は3日目。前は男女別に戦っていたが、今回は合同でやろうということになったのでやりあっている真っ最中だ。

「今日も勝たせてもらうからね！！」

可憐が呟いた。それでいてなかなかの迫力がある。

「私は負けはしないから」

彩香が言い返す。可憐の呟きをちゃんと聞き取っていたのだ。

「ふん！」

「いくぜ!! 一閃————」

拓哉が叫び、雷輝に鋭い一閃を浴びせようとする。
しかし雷輝はもうやられはせずに、その一閃を受け止めた。

「お前の魂胆は見え見えだよ!!」

雷輝はニヤリとして言った。

「何だって?!」

「俺もな、お前の真似くらいできるんだよ!!」

そう言って雷輝は拓哉の真似をして、一閃と似たような振りを拓哉に向かった。

「おい、俺のそれがんなもんなのか?」

拓哉が叫び返し、雷輝に強い打ちを食らわした。

「っ!!」

雷輝は腕が痺れた。こんな経験は初めてだ。

さらに拓哉が雷輝の剣に向かって自分の剣を振り下ろす。
雷輝の剣はあっという間に地面に落ちた。

「痛っえ〜」

雷輝が手をブラブラさせて言った。

「悪い。そんな落としてやろうなんて気持ちにはなかったんだよ」

拓哉が剣を拾って雷輝に返した。

女子はまだ続いているらしい。

「やれやれ、困ったモンだ。なんでいつも俺達が先に終わるんだろうな」

雷輝が言った。

「確かに」

拓哉が言った。

「はいっ!」

可憐が剣を勢いよく彩香に突き出す。

彩香は交わしてよけ、可憐に剣を薙いで斬りかかった。

可憐は体を後ろに傾けて避けた。さらに彩香が剣を突き出して可憐のほうに向かってくる。

可憐はその昔、体操を習っていた。その上に可憐はその体操スクールの中で一番跳躍力があつた、つまりジャンプ力だ。

可憐がふいにその動きを思い出し、彩香が突き出した剣をジャンプして蹴り、上へと舞い上がった。これには他の者も驚いたが、本人が一番驚いていた。

可憐は驚きつつも体勢を変えて、剣を下に向けて彩香に向かって突っ込んだ。

彩香も上に剣を向けた。

二人の剣が交差して、可憐の剣が彩香の剣と交わった。

可憐の剣は上から突っ込んできたので勢いが強い。

彩香の剣は軌道を乱し、可憐の剣が彩香の首に当たりそうになった。

可憐は体勢を変えて地面に降りた。

危うく彩香を殺してしまいそうになった。そのせいか可憐が心臓が

バクバクいって利かない。

「参ったわ。今回は私の負け」

彩香が言った。今回あんなものを見せられるとは思っていなかった。だから、感心もし、恐れもした。

「よし、……なんかめっしやビックリしたけど、私の勝ち!」

「男子はどうなった?」

彩香が聞くと、拓哉が、

「俺の勝ちだよ」

と言った。

「なあんだ。昨日と変わらないじゃない」

可憐が言った。

「だったら、お前今日負けてることになると思うんだけど」

雷輝がからかった。

「い……、今のは言葉の綾だよ」

可憐があわてて取り繕う。

「あはは！私が勝っても良かったのかなあ、可憐？」

彩香が愉快とばかりに可憐に話しかけた。

「ああ！だから違うってば！！」

「でも、俺は負けたよ」

拓哉が言った。

「ほら、拓哉もあたしと同じじゃない！」

可憐は勝利したのに、負けた方からかわれなければならなかった。

今日で女子は1対2で可憐が勝っている。

男子も1対2で拓哉の勝ち。

偽者な試合く四日目く

一日過ぎて、とうとう半分までいた。

今日は四日目。

廊下では雷輝と拓哉が歩いていった。

「雷輝よ、今日も勝たせてもらおうよ」

拓哉が言った。

「いんや、今日はいくらなんでも俺だろ」

雷輝も言い返す。

競技場へ入った瞬間二人の醸し出すオーラが変わった。

『戦おうぜ』オーラ。

雷輝が今回は何か策があるかのように剣を拓哉とあわせた瞬間、雷輝の剣がくるくる拓哉の剣を巻き込んで回りだした。

拓哉は面白いとばかりにその回す方向と反対の方向へ回しだした。

二人の剣がぶつかるのはもう少しであろう。

二人の剣が絡み合いながら回り、回り、回り……。

ぶつかった。拓哉が来たとばかりに剣を雷輝の胴めがけて斬った。

雷輝はそれをかわして拓哉の剣を跳ね上げた。

その隙に雷輝は拓哉の体の近くへとより、拓哉の腹あたりを斬ろうとした。

もちろん寸止め。

「ドウ!!」

これが雷輝の決め言葉。

「・・・え、剣道？」

拓哉が呟いた。

「そう。まったくもってその通りだよ」

雷輝が剣を引いた。

「けっ、俺の負けだぜ」

拓哉が吐き捨てた。

そして互いに向かって一礼して、ドアを開けて出て行こうとした。そこには、可憐と彩香がいた。

「おう、お前らもやりにきたのか？」

拓哉が話しかける。

「そうだよ。どっちが勝った？」

と彩香。

「俺だよ」

「と、いうことは・・・。2対2？同点かあ」

可憐がこれであっているかどうか気にしながら言う。

「というかさあ、女子はどうなの？」

雷輝が尋ねる。

「今ね、1対2で可憐が勝ってる」

彩香が苦笑いで答える。

「そうか。頑張れよ」

二人はそう言ってドアの向こうに姿を消した。

「さて、やりましょう？」

女子もやるときはオーラが変わるものである。

二人とも剣を抜き、可憐が先に飛び掛った。

彩香もそれを受け止める。二人としばらくは剣をがち合わせるだけである。

「可憐って面白くないわっ!!」

彩香が叫んだ。

「何ですって?!」

「勘違いしてる? 違うわ。剣で話すときにおいてね」

彩香がからかうように言った。

「戦ってるときにも彩香は冗談を言うのね? 全く、見上げた根性だわ」

可憐が吐き捨てた。彩香はその言葉で本気になったようだ。

可憐に斬りかかってくる。可憐はそれをうけとめて、同時に流した。彩香の剣が横に流れる。しかし彩香はすぐに持ち直し、剣の面を使
って

隙を見ながら可憐の腰を打った。これらなら死ぬ心配はない。

しかし可憐は思いのほか腰に衝撃を受けた。

彩香が流麗な動作でつばめ返しをした。一の太刀はかわせても、二
の太刀はかわせまい。

まさに、その言葉に可憐はハマってしまった。

一の太刀はかわしたが、二の太刀が襲ってくるとは思わなかったの
だ。

彩香の剣は可憐の短剣を弾き返し、首に当てた。

可憐が一瞬彩香のほうを見た。睨んでいるようでもある。

しかし視線を緩めて下がった。

二人とも一礼。終わりの合図である。

女子は2対2で同点、男子も同じく同点である。

偽者な試合〜五日目〜

「ああ、なんか体調悪い……。お腹痛い」

そう苦し紛れに小さく喚いたのは彩香だ。こんな風に喚き散らすのも珍しい。

「彩香、大丈夫？今日の試合どうする？」

「あ、……。うん。多分できるわよ。可憐が勝っちゃったら困るし」

可憐がそれに笑いで応じる。何か含んでいるような笑いでもあるが。

「そうだね……。まあ、そんなときはまたダリユーンに運んでもらえばいい話だし」

「ちよっ、可憐！！」

「言ってこようか？」

「いいですっ！！前も体調悪いの何のって言われて無理やり連れてかれてっ！！」

「何彼氏に向かって不平言ってるのよ」

「……。嬉しかったけど」

少ししてから彩香が言った。

「行こうか？」

「えっ、行けるの？」

「大丈夫よ」

見ると彩香が余裕の笑顔を見せた。

「うん、じゃあ・・・」

二人は歩き出した。

「ね、最近雷輝とはどうなの？」

彩香が唐突に聞いた。

「んー・・・、上手くいってるよ」

「本当？」

「うん。彩香と拓哉の目がないところで会ってるよ」

「ふうん……。キスしたりしてないワケ？」

「へっ?!」

可憐の声が1オクターブ上がる。

「キスだってば」

「……実は」

「……え? 付き合った当日にキスしたあ?」

彩香の声も素っ頓狂になる。

「うん。なんか、彩香の期待に背いて悪かったけれど」

「ふうん……。そうなんだ」

「彩香はどうなのよ?」

「……無い」

「ええっ?!」

「……悪かったわね」

「しないの?」

「告白されたときに、もしかしてされるかもっ！、って思ったらさ
れなかったし」

「意外でスイマセンね」

「ダリユーンの気持ちもよく分からないの」

「ええっ?!」

「ちよっ、反応が同じ!!」

ツツこむところはそこか、と思いつつ彩香は話を進める。

「んゝ、最近会ってないしね、話してないのに」

「何それえ?!」

「いや、そこまで憤慨しなくても」

「ダリユーンに確かめたら？」

「うーん・・・」

そうこうしている間に競技場に着いた。

「始めるかあゝ」

可憐がのんびりと言う。

「そうだね。いよっと」

彩香は鞘から剣を抜いた。

「行くわよ!」

可憐が彩香に向かって走った。

「ていっ!!」

彩香は打ち返す。刃鳴りが続いた。

彩香は可憐に何度も隙を与えずに攻撃を仕掛けてくる。

可憐が勢いの強さにただ身を守ることしかできない。

その時、彩香が剣を片手に持ち、可憐に向かって回りながら薙ぎ払った。

彩香の剣が可憐の剣をへし折りそうな強さで可憐の短剣を弾き飛ばした。

「あぁっ!!」

可憐が声を上げた。

「はい、今日は私の勝ち」

「むむっ、負けました」

☆—☆—☆

女子の試合が終わった後、男子が競技場へむかって歩いていた。

ドアが開く。

「さてっ・・・と」

雷輝は肩にかけている鞆から大きい剣を抜いた。

拓哉も剣を抜いた。シャラ・・・ンと音がした。

無言の沈黙の後、拓哉が先に飛び掛った。

打ちかわしてからかなりの時間がたった。

拓哉は雷輝に鋭い突きを食らわした。

雷輝は剣の平で受け止めようと思ったが上手くいかなくて、拓哉の剣は危うく

雷輝の腹を引き裂きそうになった。

「「うおっ!!」」

拓哉と雷輝が叫んで、拓哉はあわてて剣を止め、雷輝はかわした。

「お・・・、俺死に損なったぜ!」

雷輝がまだ心臓をドギマギさせながら言った。

「そっちかい!!」

拓哉も思わずツツこみ返す。

・・・ということ。

今日のスコア。女子は2対3で彩香の勝ち。
男子も2対3で拓哉の勝ち。

偽者な試合く五日目く（後書き）

今回は女子の何気ない話について触れてみた。
男子のも書いてみたいなあ。

偽者な試合〜六日目〜

「行くぜ〜!!」

拓哉が鋭く剣を雷輝に向ける。雷輝は剣の向きと同じに体を回転させて避けた。

「そうそう逃げても意味ないんじゃないの？」

「けっ、お前は俺に攻撃して欲しいのか」

雷輝が拓哉に鋭い突きを食らわす。拓哉は避けて、剣を横に払った。

「逸れてるぞ」

雷輝がそう言って、拓哉の剣を強く打った。

思いのほか剣の勢いが強かったらしい。拓哉の剣が落ちた。

「今日は俺の勝ちな♪」

雷輝がフフンと口を歪ませた。

「明日は絶対に俺だ。勝たせてもらうからね！」

「好きにしろ」

「どうやら男子は雷輝がかったらしいよ」

可憐が彩香と歩きながら言う。

「そうなんだ」

「・・・それであの話だけど」

可憐が切り出した。

「ま、またあ？」

彩香は半分どころではない、全部呆れ気味な顔を無邪気に話している女子のほうへ向けた。

「そうだよ♪それでダリユーンと話したワケ？」

「ん？ いやぁ・・・」

「話してないのかぁ」

可憐は溜め息をついた。

「だってそんな暇ないわ」

彩香が仕方ないでしょという目で可憐を見る。

「さあてっと」

可憐が剣を抜いた。彩香も抜いた。

「・・・・・・・・っ」

無言の戦い。剣をぶつけ合いまくる。火花が散る。さながら花火のようだ。

可憐が彩香の隙を突いて自分の短剣で彩香の剣を握っている手に刃を当てた。

彩香はビクツとし、手を止めた。可憐が下がり、舞台俳優のように頭を下げた。

「私の勝ち！・・・・でございます」

「別に明日勝てばいいだけよ。明日で全てが終わるのよ」

「そうだね……。だからさっ！明日は精一杯戦おうよ、ねっ？！」
「・・・そうね」

男子のスコア・・・3対3で同点。女子も同様。

「」「明日は絶対勝つ！！！」

b y 四剣士

偽者な試合〜六日目〜（後書き）

次はやつと七日目かあ。新章スタートです。

偽者な試合く七日目く

「最近パルスの異国の者が入ったようだが・・・」

ここはチュルク国。パルスと敵対している国でもある。

王室で従者らしき者の動きが見えた。ビロードで作られた紫の垂れ幕の前に、

チュルク国王は豪華な椅子に座っていた。

忠臣の一人が答えた。

「どうやらそのようでございます」

「ほう・・・。噂は本当だということなのか？」

「私の手下をパルスに遣わせて報告を聞いているので、そのころは」

「どのような報告が入ってきているのだ？」

「はっ、一人が申しますには、『四剣士』と呼ばれるものが城下町で買い物をしていたと

いう報告が入ってきております。農民達の喧嘩を止めるところも見ました」

「なるほど・・・。それで、お前が見るからにそいつらは剣術は上手いほうであろうか？」

「むむ……。お返事は致しかねます。しかし農民を凌ぐ力は持っていないのですが」

チュルク国王はハッ！と嘲笑った。

「農民に勝てて何だというのだ。農民にも勝てぬ輩はクズかな……。いや、カスかな……」

「どちらでもよいと存じますが」

「そうだ、そんなことどうでもよい」

チュルク国王は急に真顔になった。

「……。あいつらを呼んでくるのだ。東洋とか言うところから来た、不気味な奴ら……」

もしかすると、出身地は同じかもしれぬぞ」

「……？　そうでございますか」

「お前はまだ分からのじやろう。ふふふ……。同じ出身地の者達を戦わせる……」

それが戦いの醍醐味だ！」

ハッハッハッとチュルク国王は高笑いを上げた。

「あやつらと呼んで来るのだ！」

「あやつら、と言いますと？」

「最近わが国にも来ただろう。あいつらだ」

「はっ、かしこまりました・・・」

忠臣は部屋を出て行った。

「どうやら、面白いことになりそうだのう・・・」

チュルク国王はニヤリと笑った。

陰湿で邪悪な笑いだった。



「近頃チュルクからの使者が来るそうだ」

パルスの若き国王アルスラーンは紙をクルクルと巻きながら言った。

「何の目的あつてのことでしょうか・・・」

黒衣の騎士、ダリユーンはそう言った。首を傾げている。

「陛下、四剣士のことではございませんか？」

ナルサスが案を出す。

「理由は何だ？ナルサス」

「陛下はダリユーンの言うとおりになさって仲間をいろいろな他国に送らせられました。」

しかし、チュルクからは何も得られなかった・・・」

「最近チュルクは警備をもの凄く強くしているんだとか」

ダリユーンが話し出した。

「交通規制も厳しくなっておりますし、宮内では他国からの使者が来た理由などを、探っております故」

「ふーむ・・・」

アルスラーンは考え込んだ。

「恨みを買われることもしていないしな」

片目の武将クバードが言う。

クバードは、元アンドラゴラスに仕えていたが、アトロパテネの戦い以来、

どこかに姿を消した。一時はアルスラーンの従兄弟であるヒルメスに仕えた事も

あったが、「馬が合わない」と出て行ってしまった。

そして、今アルスラーンに仕えている。

本人曰く「不平は無い」らしい。アルスラーンはちゃんとした戦いの報酬をくれるし、

その結果にいつもクバードは満足していたからである。

ちなみにクバードは女好きで、よく後宮^{ハレム}に行ってはよく女達と戯れている。

剣技は一流。そのことを自分もよく分かっているし、敵も認識してくれているから
それなりの意地はあるのだ。

「興味は示したということか？」

ダリユーンが聞く。

「そういうところじゃないのか。もっばら、向こうが誰かを恨んでいなければ生きていけない、
というのであれば仕方ないがな」

頷くのと同時にダリユーンはクバードの冗談に笑った。

「一週間後に来ると・・・」

アルスラーンは呟いた。

「一応、四剣士殿にも知らせておいたほうがよろう」

ナルサスが言い、ダリユーンが部屋を出て行った。

しばらくすると、四剣士を引き連れたダリユーンが現れた。

四剣士は緊張もしているようでもあったが、きちんと、

「陛下、何の御用でございましたか」

と言ひ、ひつぽす跪く。

「顔を上げてくれ」

アルスラーンは恐縮していった。アルスラーンが好かれる理由がここにもある。

「実は近々、チュルクからの使者がくるそうだ。こちら側から見ると、どうやら、お前達に興味を示しているらしい」

「左様ですか。対応は・・・」

と雷輝が応じる。

「対応は・・・何もしなければいいだろう。何も話すな」

ナルサスが言った。口元に微かな笑いが見て取れる。

「まあ、しらを切れってとこだ」

ダリューンも付け足した。

「まあ、そんなところだ。分かってくれたか？」

「はい。もちろんでございます」

「では、剣の練習をするなり、休むなり、好きにしてくれ」

その言葉が解散の意思を告げた。その言葉で四人はハッとした。

「そうだ……。今日だよ、最終日!!」

可憐が囁いた。四人はアルスラインに礼をしてから、退室した。

女子と男子は自分の部屋に戻り、剣を取ってくるなり、競技場へ集まった。

「なんだ、女子もかよ」

「こっちの台詞だっつーの!!」

キン、キン。刃の鳴る音が競技場全体に響き渡る。

「まだまだよ!!」

「なんの!!」

男子達の戦いもヒートアップだ。

「へん！それしか、できないのか？」

「言ったな！」

剣を構え、突っ込んでいく。

一方、向こうでは予想よりも早く、決着がついていた。剣の反動でよろめいた可憐の後ろに彩香が回りこんで県を可憐の首筋にあてがったのである。なんともあっけない終わり方だった。

「やったあー！！！」

彩香が驚喜の声を上げる。可憐はいじけた顔をしている。

二人は礼をして、男子の戦いを見守った。

拓哉が地面に剣を滑らせ、相手の攻撃を待つ。

「結構俺達良い線行ってるじゃね？」

雷輝が拓哉に詰め寄る。

「でもお前に勝つまでは上達したとは言えない！！」

拓哉が勢い良く雷輝のほうへ飛び出していく。

反応は雷輝のほうが早かった。一瞬の差ではあったが、そのまま拓哉の剣を弾き飛ばし、

胸に向かって、剣を突き出したままの格好で止まった。

「上達していないな。・・・俺の勝ちだ」

「チッ、負けちまったか・・・。それじゃアイツに顔向けできない」

「何か言ったか？」

「何も？別に何も・・・」

この頃拓哉がこの宮廷内にいる者と逢瀬を重ねていたことは、もちろん誰も知らない・・・。

「じゃあ、私と雷輝ね」

彩香が立ち上がりながら言った。

「女子とはやりあいたくなかったんだよ」

「あっそう。でも、勝ってしまうんじゃないかしら？」

彩香が軽くあしらった。こうして彩香と雷輝の戦いは始まった。

「体力的には勝てるぜ」

「技術的には、私の方が上」

その言葉が戦いの挨拶になった。

雷輝が力まかせに彩香の体めがけて剣を振る。彩香の体が粉々になっ
てしまいそうな程の

力だ。彩香はそれをかわして、斬りつける。

雷輝は打ち返して、彩香をよろめかせた。そのうちにと、雷輝が剣
を振る。

ヒョイとかわして彩香は足をバレリーナのように180。後ろへ上
げた。

「柔軟だな」

雷輝が驚いた顔をして言う。

「昔、バレエをやってるものでして」

彩香が微笑した。清らかな笑いではなく、妖しい笑みだった。

雷輝が彩香のものへ、近寄った。

彩香はその行動を待っていたかのように、上に上げている足に剣を
引っ掛けた。

なんと、硬い剣は曲がってちゃんと引っかかる！その剣を弾き飛ば
して狙いよろしく、

雷輝の顔にモロに当たった。

「痛ってえー！！」

雷輝が頬を押さえ、崩れ落ちる。

「い、今、剣が曲がったぞ！！」

拓哉は目を皿にしている。

「でもっ、イ、イリュージョンじゃないわっ!! ちゃんとした・・・。剣術よ」

彩香はしどろもどろだ。・・・なぜか。

「そうとう苦勞して・・・。できたんだ。良かったあ・・・!!」

可憐は賞賛の拍手を彩香に送っていた。

「すごい!! 彩香、そんなことできるんだ!! 今度教えて!! 今でも!!」

可憐が早口で述べ立てる。

「「俺にも」」

拓哉と雷輝が同時に言い、同時に笑った。

偽者な試合〜七日目〜（後書き）

次から新章（多分最終章・・・）が始まります。
七日分書いてよかったなあ。早く次話書きたい・・・！！

二人の兄妹（前書き）

遅くなって本当に申し訳ありません・・・。
もう何回土下座しても足りないくらいです。

二人の兄妹

一週間後、パルスにチュルクからの使者が来た。

そのチュルク国王を含めた『4人』は王室に通された。
そこで四剣士は他国の人間と久しく会ったのである。

キィ・・・・・・、と扉が開く。

入ってきたのは、誰もが傲慢だと認めふんぞり返っている国王と、
黄色い膚をした人間だ。

一人はとても聡明な顔立ちをした女性だった。しかし、どこことなく
艶やかさを発し、見る者の目を
奪っていた。

男性のほうは、こちらも美青年ではあったが、こちらを見る目に少
しばかり馬鹿にした視線が
混じっている。

二人とも、四剣士と同じような年齢に思われる。

「変ね・・・・。中国人かしら？」

彩香が二人を伺いながら可憐に訪ねた。

「分からない・・・・。けれど、日本人にも似ているかも」

可憐も囁き返した。

女性の口から、ちゃんとした日本語が流れ出た。

ここは勿論、パルス国なのではあるが、4人ともこの国が話している言葉は日本語としか思えないものだった。そのため、自分が何語を話しているのか、よく分からなくなるときがある。

「こんにちは。パルスの国王様ですわね？こんな格好でご無礼をお許しくださいますよう」

女性は女物の戦士服を着ていた。彼女には、どちらかというと華やかなドレスのほうがいい合いそうなのではあるが。

「いいや。チュルクがわが国と友好を築いてくださる事は、私も嬉しく思っている。そなたの服装などに、口出しはしない」

「ありがたき存じます」

女性は深々と頭を下げ、こう言った。

「私の名は、……杏奈と申します。こちらは弟の翼です」

女の隣にいた青年が頭を垂れた。

「翼と申します。この度はパルスの国王様にお目にかかれて嬉しく思います」

「私も嬉しい。……しかし、堅苦しい挨拶はよそうではないか。それぞれ、自己紹介としようか」

女は言った。

「日本人です。名は杏奈」

「右に同じく、翼です」

名前を言われた四剣士たちは、内心動揺した。明らかに日本人の名前であるし、そもそも本人が

『日本人』と告げているのである。

しかし、言われた以上、こちらも返さなければならぬ。拓哉はそう考えつつ、自分の名前を言った。

「拓哉です。・・・日本人です。ちなみに」

「同じく日本人の雷輝です」

「可憐です」

「彩香です」

可憐と彩香は出身地を何回も言うのも変だと思い、名前だけにしておいた。

その瞬間、空気が変わった。

杏奈と翼が剣を抜いたためである。

二人は目にも留まらぬ速さで4人に迫った。

4人はあまりの速さにピクリともできなかった。しかし、影で動いた人物がいた。

ダリユーンである。

4人の前に立ち、一人で二人分の強さを受け止めた。そして手首を捻り、剣を払った。

「何をする気だ?!」

ダリユーンが怒り、二人はあっさり言い放った。

「この方達が強いか見ておこうと思ったのよ」

「あいにく、強く無さそうだったけどね」

翼も言った。視線が可憐に注がれている。可愛い子だと思い目をつけたのだが、もう少しという時に止められてしまった。

「なんですってえ?!」

可憐が激怒する。彩香もそうだった。

確かにこの二人は強い。自分達と比べ物のにならないくらい強い。戦っても勝ち目はないだろう。

しかし、4人はこの七日間の戦いで、剣士の誇りというものを悟っていたのである。

それを傷つけられたのだからたまらない。男子二人もそうだった。

「こいつら……。ムカつくな」

雷輝が怒りをむき出しにして言った。

「全くの同意見だ」

拓哉は唸った。

杏奈と翼はクスリと笑い、ほぼ同時に剣を上へ投げた。

何をするのかと思いきや、剣は二人が差している鞘に吸い込まれていく。

「・・・・・・・・・・」

一同は言葉を失った。杏奈はそれ見たりと笑い、こう言った。

「私はこの方達と同じ日本人として戦いたいのです……。戦士としての誇りをかけて」

「僕達はちょっと強くなりすぎてしまつて。相手がいなくなつてしまつたんです。そこを暇つぶし

にと・・・・・・・・」

明らかに自分達を馬鹿にしている口調に、雷輝は怒りの頂点に達した。

「おい！！お前ら、俺たちを挑発してるのか？」

「おや、そう聞こえました？」

翼はどこ吹く風で答え、さらつと言った。

「まあ、貴方達が僕達に勝てるとは思ってませんけど。——ねえ、姉さん？」

「馬鹿なこと言わないの！！・・・本音を漏らせばそうだけれど」

「はあ?!」

可憐はもう体から湯気が吹き出そうな勢いである。

「おいおい、待ってくれよ、僕は君の可愛い顔を、そんな風に歪めたくは無い」

「そうさせたのは誰なの?!」

このままでは喧嘩は永遠に続く可能性があるとみなしたアルスラーンは、六人にこう告げた。

「喧嘩はもうよしてくれ。君達はそんな事をするために歓迎し、参ったわけではないのだろうか?」

四剣士の顔が固まった。仮にもパルス国王に自分達の用をすませるため、ずっと待たせていたのである。

「あ………」

反応が一番素早かったのは拓哉だった。膝をつき、国王二人に謝った。

「申し訳ありません……。私達の私用のために陛下を待たせてしまっていたのは、臣下の勤めとして最も悪い事であると分かっているが……。本当に申し訳ありません」

三人も咄嗟に跪いた。

「「申し訳ございません。臣下として、羞恥の至りです」」

声が重なった。それが面白かったのか、国王二人はふ、と笑い、4人に立つよう命じた。

少なくとも、チュルク国王は嘲笑したつもりであったのだが。

（この国王もこんな臣下を持つなんて……。さすが若いもの同士だけあって、息が合うの
だろうな）

そんな事を考えていた。

そのとき、翼がこんな事を言った。

「賭けをしたらどうでしょう？」

「賭け？」

拓哉はオウム返しに言う。

「そう。賭けだ。ちょうど僕の好みに合う女の子もいるし……」

激しく自分のことを睨みつけているダリユーンを押しつけて、可憐の顎を指先でつまむ。

「陛下！」

「放っておけ。これは当事者達の問題だ」

「しかし・・・」

「いいから、下がれ」

そう言われ、ダリユーンは渋々下がった。しかし目が、「彩香に触れたらただじゃおかない」という強いSOSを発している。

パシッという音の後に、可憐が自分の剣を抜いた。

「これ以上私に触ったりなんかしたら、この剣であんたをぶった切つてやる！！！」

「そんな短い剣で？」

「・・・つつ、関係ないわ！！」

「つつーか、可憐がお前を切る前に、俺がなんとかしてるよ」

雷輝が言った。その目は敵意に爛々と燃えている。好きな女に手を出す奴は・・・。
と見えないバリケードを築いていた。

「僕達が勝ったら、そこのお嬢さんを頂戴するよ」

「・・・つつ」

雷輝は引き下がりたくは無かった。

「約束だ。守ってもらわなければならない」

「……いいわ。行ってやるわよ」

可憐が目の光をなくした———と思ったのもつかの間だった。

「あんたを縛り上げてどうにかしてやる!!」

「……勝手にしろ。……姉さんはどうする？」

杏奈は薄ら笑いを浮かべていた。

「4人のうちの一人の命を貰う」

「それは無いだろう!!!」

アルスラインは憤慨した。今回はあくまで『友好』の証であった筈なのだ。

人を殺したりすれば、人々の醜聞に関わってくる。その視線をもう一人の国王に

送ってみたものの、意地悪い目で返されただけであった。

「……いいだろう」

「あなたはいいか?! 臣下にそんな事をさせて!!!」

「いいと申しておる」

アルスラーンは絶句した。もちろん、他のものである。

「大丈夫……。すぐに殺しはしません。ターゲットを決めたいと思います。いいでしょうか？」

「よからう」

チュルク国王がそう言った。何の考えもなしの言葉だった。

「では……………」

杏奈の目が一人ずつ眺め回している。視線は、ある一人の前で止まった。

「あの『花』を」

杏奈が厳かに言った瞬間、召使達がさっ、と前に進み出る。手にはとても色とりどりの美しい花を籠に入れて持っている。

「被せなさい」

召使達は迅速に行動した。まず、他の三人を押しつける。もちろん抗議の声を上げたが、見向きもしない。そして召使達の手にある花は一気に一人に被せられた。

「ああ————っっ!!」

苦しげな声を上げたのは――――。

拓哉だった。

二人の兄妹（後書き）

続き……。書く暇があるか分かんないですね……。でも、希望は持とうと思いますので、これからよろしくお願いします。

恋は徒然に――

「あ――――っっ!!」

苦しげな声を上げた拓哉は、地面に突っ伏して大きく喘ぎ始めた。

「何するの!!」

爆発寸前の彩香と可憐は声をそろえて言った。

「毒があるんでしょう!! そうなんでしょう?!」

彩香は杏奈に詰め寄った。しかし、杏奈はサラリと返す。

「あら、そんなに彼が心配？」

余裕の笑みまで浮かべている。こっちが苦しむのを見て嘲笑っている。

「大丈夫よ、この痛みもしばらくすれば治るわ」

杏奈は事も無げに言う。

「まあ……。命が残り少ないのは、確かね」

その一言に全員は絶句した。やはりあの花は猛毒を含んでいたのであらうか。

「ちょっと待って欲しい」

申し出たのはアルスラインだった。口調は物柔らかだが、その背後に得も知れない怒りがある。

杏奈はそれを察知しながら、あくまで澄まして答えた。

「何でしょう？」

「その花は解毒薬でもあるのか？」

アルスラインは背後に見えない炎を掻き立てながら言う。

杏奈は懷から小さい瓶を取り出した。杏奈の小指ほどの大きさしかない、一飲みで終わってしまいそうなほど小さかった。

「これよ」

自慢げに瓶を振りながら杏奈は言った。

「これを貴方達の勝利の報酬として、くれてやることにするけど・・・。どうする？」

飲まなければ、彼は死んでしまうわよ」

杏奈は口に手を当ててクスクス笑った。

こいつ、とんでもないサディストだ————。

全員がそう思ったとき、影で動いた人物がいた。

侍女の姿をした人物は素早くぐったりとした拓哉を背中に、庇う姿勢をとる。

アイーシャだった。

最近の事でもあるが、アイーシャと拓哉は、始めて出会った夜から、度々逢瀬を重ねていた。

逢瀬というほどのものでもないのだが、落ち合う時間を約束し、会ってはいろんな事を話していただけたのである。

特に拓哉は昔から神話などを読んでいたため、星座にまつわる神話などをアイーシャによく話していた。アイーシャのほうも、拓哉の話にキラキラと目を輝かせ頷いていた。

アイーシャも侍女ならではの話がたくさんある。

最近、私達の間では、けっこう面白い噂が飛んできていまして・・・と話し出す。

無論、宮廷内であるからして、そういうことが避けられないのだが、近頃北東側に位置している

大きな貴族がどうのこうののだの、ゴシップ記事が丸々何ページも書けそうな勢いである。

拓哉はそんな愚痴にも似たアイーシャの話を、面白がって聞いている。かつ、同情する。

アイーシャは毎日毎日そんな話をしてて飽きないのかい？と聞く。しかし、アイーシャも

そんな話は日常茶飯事です、もっと凄い話があるんですよ・・・と真顔で言い、話の輪はしだいに広がっていくのである。

いつしか、二人は話を聞いてくれる相手に淡い気持ちを抱くようになっていた。

アイーシャは前よりもずっとずっと、拓哉と会う時間が待ち遠しくなり、溜め息をつく

回数が増えた。何寂しそうにしてるのよ、と仲が良い侍女に聞かれると、何でしようね、

ある男性の方と会うのが待ち遠しいんです。そんな事を言った。するとその侍女は快活に
笑い、教えてくれた。

『あんた、それはね、恋じゃないのかい？』

いきなり、唐突に現れた『それ』はアイーシャの心を大きく揺さぶった。

他の侍女が、あの方をどうかこうとか言っていたが、それはこれの事だったのか。

確かに、拓哉のことを想うと、胸が苦しくなるし、でもこれまで拓哉と会って話を二人きりで

してきたと思うと、顔がカッと熱くなって。でも、すごく幸せな気持ち。

これが――、恋か。

しかし、実際拓哉と会って話をしていると、前に比べて上手くないかないものである。

前にはあたふたして、すぐ転んで、拓哉に支えられたというのがあった。あの時、

思わず目が合ってしまったのだが、慌てて反らしてしまった。
後で悔やんでも仕方ない。後の祭りだ。

拓哉のほうも、アイーシャに不思議な気持ちを抱えていた。

何というべきなんだろうか、あの笑顔を見ると心がホッとするのは、
気のせいなんだろうか。

彼女とは、心の何もかもをさらけ出して話せる、そんな相手になり
つつあった。

他の雷輝や、可憐や彩香と言ったメンツとは違う、もっと新しいタ
イプの人間である。

アイーシャの健気な姿を見ると、無性に可愛いなと思ってしまう。
う。

現在は、二人の気持ち为核心へ近づきつつある。

しかし、後もう一步というところで踏み出せない。それが二人の弱
点だった。

拓哉は自分の真の気持ちにまだ気づいていないので、アイーシャが
先陣を切るはずなのである。

・・・が。

どうにもこうにも、今の二人の状況は、良いでもなく悪いでもなく、
ただ平常な線を

保っていた。二人がその線を大きく上回る日が来るのだろうか。
可憐がこの話を聞いたなら、さぞかし悔しがるに違いない。

・・・そこで話は戻るが。

アイーシャも、四剣士や、杏奈たちがいる場所へ一緒に同行していた。

杏奈を見たとき、これが人間の顔か、と嘆息したほどである。女神のように美しかった。

しかし、性根は最悪。それに、なんと拓哉に毒をふっかけることまでしてやってのけたのである。

アルスラーンからは、よっぽどの事が無い限り、決して前へは出るなど言われていたのであるが、

苦しむ拓哉を見て、感情が抑えられなくなった。

どうして？ どうしてこんな事さなきゃいけないの？

そう思った瞬間、アイーシャは拓哉を背に庇っていたのである。

しかしそうして一番驚いたのは当のアイーシャだ。

あんなに言い含められたのに。国王様に、前では決して出るなど言われていたのに。

出てしまった・・・！！ そう思ったアイーシャだが、引き返す事はできなかった。

もちろん、そんな気もこの侍女にはさらさら無かった。

ぐっ、と言葉を喉にためてから、こう言い放った。

「この方を、傷つけないで下さい！！」

恋は徒然に——（後書き）

・・・・・。なんか拓哉とアイーシャの話がめっちゃ多くなりました。
スイマセン。さて、次話は、杏奈の酷さをもっと書きたいなー、と
思っているので、ぜひ読んでもらえると嬉しいです。
それでは☆

美しき剣士

アイーシャはキツ、と杏奈を見上げた。

杏奈はこの侍女の行動に一瞬目を見開いたが、それもつかの間、声を上げて笑い出した。

「いやだ、この人ったら、もう・・・!!」

拓哉が身を振る。

「駄目だ・・・。アイーシャ、俺に近づくな・・・。毒が移るかもしれない・・・」

それでも、アイーシャはお構いなしに拓哉の体を抱きしめる。こんなに好きなのに。なんで拓哉がこんな事を。

酷い。許せない。

「最悪・・・っっ!!!!なんて事を!!」

彩香が顔を歪める。

「クスクス・・・。安心して。毒は移ったりしないから。さっきから言ってるけど、

貴方達が勝ってくれないと、この人死んじゃうわよ?」

杏奈はチラリ、と拓哉に目を向ける。

「いいよ……やるよ。それでしか拓哉を取り戻せないの
あれば!!」

雷輝はそう言った。怒りが体中を渦巻いている。爆発しそうだった。
どうにもならないほど。

「あんた達、ぶっ殺してやる!!」
可憐が手をブルブルと震わせながら、言った。

「その代わり、私達も、賭けはさせてもらうわ」
彩香も言っていた。

「そう……。良かったわ、誘いに乗ってくれて。ありがたいと思
ってる」

(((思っ
てないだろっ!!!!)))
三人はすぐさま心の中で否定する。
それを杏奈が察したのか、

「疑ってるの……? そんなわけ無いでしょ。戦えて光栄だわ」
と言ってきた。

ありえないと三人がまた思っていると、翼が話に乗り込んできた。

「それで、君達の賭けはどうする?」

そこで誰もが驚く軽やかさで笑ったのは、彩香だった。

彩香は今とても怒っているはずなのに、どうしてそんな顔ができる？

「さて、と。そうね……。ここは私が4人を代表して言いたいんだけど、駄目？」

と提案した。口元には、先ほどの笑みがまだ残されている。

「いいけど……。どんな内容だ？」

彩香は拓哉の下へ行った。倒れている拓哉のために腰を低くし、何事かを小声で言う。

それに対して拓哉は笑った。

「できるのか？」

「できるわよ。私達を馬鹿にした罰なんだから……」

「でも、そいつがそれかどうか分からないだろう？」

「大丈夫。私はそういうことに関してももの凄く勘が鋭いの。安心して」

そう言って彩香を可憐と雷輝のもと戻り、先ほどと同じ事を告げた。二人は驚き、拓哉と同じ質問をしたが、彩香はそれを否定した。

三人の了解を得たところで、彩香はこう言い放った。

「そうね……。まず当てっことをしたいのだけど、いいかしら？」

これに兄弟は首を傾げた。

「・・・いいけど？」

「大丈夫、そんな顔しなくても質問は一つだけ。貴方達の後ろにいる綺麗な方は、

貴方達の剣のお師匠様でなくて？」

杏奈はとっさに後ろを振り返る。それが正解だということを彩香は見取った。

黒い軽装に、同じく、黒いベールを被っている。腰には剣が差してある。

その女の目は金色に近い眼をしており、彩香と少し似た切れ長の目であった。

その女は何も発しなかった。チラリと杏奈を見ただけで、一言も言わない。

杏奈は悟った。彼女が言いたいことを。彩香は、勝ったら自分の師匠を殺すと迫っているのだ。

「やめて！！あのお方だけは！！なんだったら私が死ぬわ。それでいいでしょう？」

「そう？私達はあのお方を指名したのだけれど」

「代わりに私が死ぬ！それで気は済むでしょ？なんで師匠なのよ」

「貴方達が拓哉を毒に犯させた。だから、私は師匠を殺せば良いかって考えたの」

「だからって・・・!!!!」

そこで黒の装束の女が動いた。風をも感じさせる軽い動きで、彩香の目の前に立つ。

女は顔を覆っているベールを取った。彩香はそのあまりの美しさに声も出ないほどであった。

それは他の者達も同じだった。ある兵士は天女かと思い、ある剣士は女神のようだと思った。

雪のように色白の肌。鼻の筋も通っており、唇は、さくらんぼのように赤く、つやつやしている。

髪は真っ黒で、何も装飾をしていない髪であった。そのため、とてもサラサラと腰の辺りまで髪が落ちていた。

杏奈と翼でさえ、うっとりとその美貌を見つめている。

女は笑った。邪悪な笑みではなく、親しみを感じさせる笑みでもなかった。

ただ単に笑っているだけのようであった。それだけでも、人々は何かしら畏怖を覚える。

「私を殺したいと？」

その女は言った。高い声でもなく、鈴のような綺麗な音を発していた。

その場にいる人間はその声に聞き惚れた。しかしそれ以上に不思議であったのは、

（このような人間が剣を扱うのか？）

という事であった。体をほっそりしていて、腕もそんなに筋肉が無いように思える。

彩香も可憐も当初、剣を扱うのに苦勞したものだ。今でようやく、自由に使えるようになった。

女はさらに言った。

「いいでしょう。私はこの二人を一番弟子として訓練させてきました。誰にも負けることは無いと、

二人もそう思っていることでしょう。貴方達のような若い者と剣で渡り合うのは、とても

良い事だと思っています。先ほども言いましたが、二人は誰にも負けない自信があります。

私もそう思っています。二人がその信念を曲げるようなことがあれば、私は命を絶ちましょう」

その言い分に関心し、また存在を恐れた彩香は、頑張って女と視線を合わせた。

目を合わせるのが怖い。足が竦みそうになるが、なんとかして堪える。

「・・・そう言ってくれるとありがたいです。杏奈達が師匠のことを大切に思ってるように、

私達にとっても、拓哉はかけがえのない存在なんです。だから・・・

」

「杏奈達がいきなり勝手なことをして、申し訳なく思っています。しかし、2対4では、こちらが不利なのも分かっているはずです。そして、言葉が矛盾して失礼ですが、二人は一人につき貴方達の二人分の力を持っていると私は信じています。お互い、正々堂々と頑張らしましょう。これは、命をかけた真剣勝負なのですから」

「はい、そうですね。私達も杏奈達には負けない自信があります！奥様が言われたように、これは命をかけた真剣勝負ですから、手抜きは一切しないつもりです」

ここまでこの人相手によく言えたと思つた。まさに天女のような女性は、何をしていなくても、発している空気がある。

「ええ。私達もそうするつもりです。・・・それにしても、『奥様』だなんて言われたのは久しぶりね。奥様だなんて・・・」

それきり女は黙ってしまった。彩香が怒らせてしまったのかと思い、慌てて取り繕う。

「あ、あの、怒らせてしまったのであれば・・・」

「え！いいえ、そんな事……。ただ、そう呼ばれるのはあまりに久しぶりだったものですから……。懐かしかったです」

「そうですか。安心しました」

「では、私達はお暇することになりました。杏奈！翼！来なさい！陛下はどうなさいますか？」

「いや、私は少し、パルスの国王と話していかねばならんことがあるのでな」

「そうですか。では二人とも、特訓を付けますよ。・・・それでは」
女が立ち去りかけた。二人もそれに従っている。

「そうだ」

女が足を止めた。

「名前を言っておりませんでした。申し訳ないです。私の名前は、セレスティア・オーデンです。

それと・・・。今貴方達のお仲間がかかっている毒は、『情毒』
といひまして、好きな人の事を

思えば思うほど体が蝕まれていく毒です。痛いからといって、死ぬ時期が早まるわけではないですが・・・。ですから、想い人を傍に置くのは、かえって悪い事かもしれません。

こんな事をして、申し訳ないと思っています。しかし、

・・・こちらにも命をかけているので。戦いは平等でないといけませんから」

そういう置き、女神とその弟子は去っていった。この部屋を出て行

くとき、セレスティアが寂しそうな顔をしている事に彩香は気づいた。

美しき剣士（後書き）

投稿できました！！！！

書き終えて、ホッとしています。年内に完結させたいけど、んなことできるのか？ってカンジです。来年からは、新しい話を書きたいと思っています。

あらすじも完成（？）しているので。

早く終わらせられないかな・・・！！！！

Y姫ちゃん

b

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4800p/>

アルスラーン戦記～私だけの物語～

2011年11月17日19時43分発行